

Center for Innovation in Traditional Industries Yearbook 2018-2020

Kyoto Seika University

京都精華大学



伝統産業イノベーションセンター イヤーブック 2018-2020

伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック2018-2020

Center for Innovation in Traditional Industries
Yearbook 2018-2020

京都精華大学

Kyoto Seika University

伝統産業イノベーションセンターについて

未来の、手仕事のために

京都精華大学が4年制として開学した1979年、学生が伝統産業の工房に通い手仕事の技やその精神性を学ぶ〔学外実習(現：京都の伝統産業演習)〕が開講しました。以来、約40年間で累計4,000名近くの学生がこの演習に参加し、今では京都精華大学の名物科目のひとつとなっています。

身につけた伝統技術を自身の表現に取り入れる学生もいれば、日本文化への関心を深めて研究者や起業家を目指す学生もいました。また、実習をきっかけに職人としての道を歩み始める学生も少なくありません。実習期間はわずか2週間ですが、さながら弟子のように過ごす日々が学生たちに「伝統」と呼ばれるものの一端を伝えています。

実習を契機に、京都精華大学では多角的な視点で伝統産業界との協業が始まりました。製品開発やブランディング、技術記録・調査、職人文化研究など、京都精華大学が誇る5学部それぞれの専門性を活かした取り組みをおこなっています。

伝統産業イノベーションセンターは、これまで京都精華大学が培ってきた伝統産業の知見を集約し、より活発な教育・研究活動に還元するために2017年に設立しました。〔研究〕〔教育〕〔社会連携活動〕を大きな軸として、世界有数の工芸産地・京都を拠点にさまざまな国や地域の手仕事との連携を目指しています。

かつてない速度で暮らしのあり方が変化する時代にあって、1000年前の職人技に挑み続ける伝統産業界の知見は私たちに多くの気づきをもたらします。

技術の背景にある物語や、土地に暮らす人々の営み。
自然素材の厳しさ、身体を動かして汗を流すことの意味。

伝統産業が次代への継承に苦しみなか、大学が「伝統」に学ぶだけの時期は終えました。
先達への尊敬と深い理解をもとに、文化の本質が受け継がれた「未来」を描き続けることが、伝統の街で育った京都精華大学の使命だと考えます。

About the Center for Innovation in Traditional Industries

For the Future of Handcrafts

The Kyoto Traditional Crafts Internship began in 1979, the year Kyoto Seika University became a four-year institution. Since then, the program has continued to offer opportunities for students to learn techniques and philosophies of handcrafts at traditional workshops and studios. Over the course of 40 years, almost 4,000 students have participated in the program, and it has now become one of the most well-known courses in the university's curriculum.

Some students incorporate the newly-acquired traditional skills into their work, while others go on to become researchers and entrepreneurs with a deeper appreciation of Japanese culture. Inspired by their internship experience, there are also those who pursue careers in traditional crafts. The program is only two weeks, but the time spent as short-term apprentices offers students a glimpse into age-old traditions.

Through the internship program, Kyoto Seika University began collaborating with the local traditional craft industry. Drawing on the expertise of the five academic departments, the university has initiated product development and branding projects, as well as documentation of cultural knowledge and research into the everyday lives of artisans.

The Center for Innovation in Traditional Industries was established in 2017 to compile and utilize the academic resources on traditional industries cultivated by Kyoto Seika University. Located in one of the world's leading sites of craft production, the Kyoto-based center aims to build new partnerships in handcrafts across national and regional borders through research, education and public engagement.

At a time when our lifestyles change at an unprecedented speed, there is much to learn from craft professionals practicing artisanal skills from a thousand years ago.

There are stories, communities and real lives behind every technique.
There is meaning in the harshness of natural materials and in manual work.

We cannot simply learn from “tradition,” while traditional industries struggle to pass down its wealth of knowledge to the next generation. As an institution that has grown in a city of traditions, we believe it is Kyoto Seika University's mission to envision a future that inherits the essence of our culture, with respect and understanding of our predecessors.

ウスビ・サコ
京都精華大学 学長

京都精華大学は2018年度に文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に採択され、3年間に渡って、国内外の研究・教育プラットフォームにおいて活発な共同研究、教育活動を実施してきました。そして、その成果物を国内の展示やシンポジウムで発表し、また、国外でも研究発表会や展覧会を開催しました。

京都精華大学は約40年間以上にわたって、伝統産業の現場で学ぶ学外演習を実施してきました。そして、継承が困難な伝統産業をアーカイブ化し、そのコンテンツをよりイノベティブに、よりグローバルに展開できるか可能性を探りました。伝統産業の継承・記録の問題は日本国内だけではなく、地球規模の問題となっていることは言うまでもありません。伝統技術を守り、伝え、さらにクリエイティブに活用することを本学の研究・教育に組み込んでいます。

京都精華大学では、2017年に伝統産業イノベーションセンターを立ち上げ、国内外の研究所、研究員と共同で、新たな伝統産業活用法とその技術に見られる可能性を研究してきました。また、私立大学研究ブランディング事業に採択されてからは、技術の伝達方法についてどのような工夫があるのかを講演会や執筆以外に、マンガという描写法の活用を模索してきました。グローバルな研究・教育活動展開をするなかで、SDGsの視点から伝統産業をどのように活用できるのかを検討し、世界規模の研究として、魚の皮をファッション素材に使用するプロジェクトを国外の様々な研究機関と共同研究しました。さらに、Humanities across Borders (HaB)という国際教育プラットフォームにおいて藍染の技術継承をテーマとした様々な国内外の共同研究が行われてきました。

教育現場で学生たちが日々、伝統産業の現場とふれ、記録し、さらに活用することは非常に得難い機会です。私立大学研究ブランディング事業の期間を終え、伝統産業イノベーションセンターは研究機関としての基礎ができました。また、伝統産業分野の学びが共通教育の一部門として設置され、これからは全学生がその学びにふれる機会を得ます。今後、さらにグローバルかつイノベティブな共同研究を継続的に展開していく所存です。そして、大学の方針でもあるSDGsをはじめ、社会の動向に率先して関わっていく予定です。

これまでお世話になった伝統産業の担い手の方々、工房、共同研究員、国内外の機関にあらためて感謝の意を表します。引き続き変わらぬご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

米原有二
京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター長

京都精華大学は1979年の4年制開学以来、京都市域を中心とした伝統産業の知見に学ぶカリキュラム構築と手仕事研究に取り組んできました。それから約40年間、「教育」と「研究」の両面において手仕事の技と精神性に向き合い、伝統文化が有する有形無形の蓄積から多くを学んできました。伝統産業界はいま、過去に例をみないほどの苦境にあります。販売不振、後継者不足、道具と材料の確保難などいくつかの課題が絡みあうなかで、解決の方法もまた、ひとつではありません。伝統産業イノベーションセンターは「表現の大学」を標榜する京都精華大学が過去の教育、研究の蓄積をもとに、「伝統」の未来像を描くべく2017年に誕生しました。

京都精華大学が取り組む「持続可能な社会に向けた伝統文化の『表現』研究」は、2018年度に文部科学省私立大学ブランディング事業の支援対象校に選定され、これまで以上に学際的な内容に成長しました。海外協定校を含む国際的な研究体制の構築によって、「伝統文化の継承」があらゆる国や地域にとっても大きな課題であり、グローバルな視点で共通の解決策を語りあうことが必要だと再認識することができました。そして、2021年度には新たに国際文化学部が発足し、人文学科に設置される日本文化専攻が京都精華大学の伝統分野の教育に参加していきます。

本報告書では、伝統産業イノベーションセンターが設立から歩んできた初期3年の取り組みをまとめました。伝統産業イノベーションセンターが取り組む教育、研究活動は立場を超えた多くの皆さまのご協力なしには成り立ちません。これまでのお力添えに心から感謝を申し上げます。また、これからも一層のご支援を賜りますようお願いを申し上げます。

- 02 伝統産業イノベーションセンターについて
About the Center for Innovation in Traditional Industries
- 04 ごあいさつ ウスビ・サコ
Foreword | Oussouby Sacko
- 05 ごあいさつ 米原有二
Foreword | Yuji Yonehara
- 08 タイムライン：2018年度から2020年度の活動
Timeline: Activities from 2018 to 2020
- 10 シンポジウム2019 | We ― 工芸から覗く未来
Symposium 2019 | We ― The Future Seen Through Craft
- 17 シンポジウム2020 | Things ― 工芸から覗く未来
Symposium 2020 | Things ― The Future Seen Through Craft

- 19 研究活動
Research
- 20 石黒宗麿研究 ― 陶芸界の巨人、石黒宗麿の足跡に学ぶ
Research on Munemaro Ishiguro

研究対談
- 24 八瀬陶窯研究会の活動を振り返って 米原有二・中村裕太
Reflections on the Yase Toyo Kiln Study Group | Yuji Yonehara + Yuta Nakamura
- 30 マンガ人類学
Anthropographiks

研究ノート
- 34 「Anthropographiks(マンガ人類学)」の手法による伝統産業調査の可能性
――インタビューとマンガ フィールドワークの視点 米原有二
Possibilities of Anthropographiks as a Research Method in the Field of Traditional Industries | Yuji Yonehara
- 40 ファッション業界における持続可能な原材料としての魚革の開発
Developing Fish Skin as a Sustainable Raw Material for the Fashion Industry
- 44 Humanities across Borders (HaB／越境する人文学)
Humanities across Borders
- 46 研究会「手仕事の学校」
School of Handcrafts
- 56 工芸文化データベースの公開
Craft and Culture Database
- 58 漆の活用法に関する調査研究
Research on the Usage of Lacquer

- 59 教育活動
Education
- 65 社会との関わり
Outreach
- 71 パブリック・リレーションズ
Public Relations

伝統産業イノベーションセンター
- 80 学内センター員
Members

伝統産業イノベーションセンター
- 81 特別共同研究員
Special Research Fellows
- 85 協定校／機関
International Partner Universities and Institutions
- 87 あとがき 米原有二
Afterword | Yuji Yonehara



Timeline: Activities from 2018 to 2020

タイムライン：2018年度から2020年度の活動

2018年度 Academic Year 2018							2019						
4	5	6	7	8	9		10	11	12	1	2	3	
● 陶芸家石黒宗麿に関する研究を開始 …p.20 ● 「手仕事の学校」vol.01：「京友禅のめがね拭きがグッドデザイン賞を受賞した理由」を開催 …p.46							● オランダ・ライデン大学国際アジア研究センター (International Institute for Asian Studies-IIAS) 主催の学会「Humanities across Borders (越境する人文学)」に参加 …p.44 ● 「手仕事の学校」vol.05：鈴木修司氏 (BEAMS JAPAN バイヤー) をゲストに迎え開催 …p.46 ● 2018 年度「京都の伝統産業実習報告展」を開催 …p.60						
● 石黒宗麿の作と思われる「木葉天目茶碗」を発見 …p.20 ● 「手仕事の学校」vol.03：「神官装束の文様に込められた祈り」を開催 …p.46 ● 「手仕事の学校」vol.04：「法衣からイスラム教礼拝マットへ——これからの伝統織物」を開催 …p.46							● 平成 30 年度私立大学研究ブランディング事業に採択される ● イスラエル国立海洋センターで魚革研究のキックオフミーティングがおこなわれる …p.40 ● 「手仕事の学校」vol.06：関根真紀氏 (アイヌ伝統文化／工芸作家) をゲストに迎え開催 …p.46 ● 京都精華大学 50 周年記念展「石黒宗麿と八瀬陶窯 —— 五〇年目の窯出し ——」を開催 …p.20						
● 「手仕事の学校」vol.02：「デザインの力が地場産業を変える——体感型マーケット「RENEW」の事例から——」を開催 …p.46													
2019年度 Academic Year 2019							2020						
4	5	6	7	8	9		10	11	12	1	2	3	
● オランダ・ライデン大学主催「第 11 回国際アジア研究会議 (The 11th International Convention of Asia Scholars-ICAS)」の分科会に参加 …p.44 ● シンポジウム「We — 工芸から覗く未来」を開催 …p.10 ● ICOM 京都大会関連事業「京都・くらしの文化×知恵産業展」の一環として、特別展「伝統とテクノロジー —— 京都のものづくり／手仕事の遺伝子」を監修 …p.69 ● アイスランド・ブロンデュオスにて魚革研究のネットワーキングイベントに参加 …p.40							● 総合地球環境学研究所と共同で人類学者フレデリック・ジュリアン氏の公開講演会を開催 …p.30 ● 人類学者フレデリック・ジュリアン氏との和紙に関するフィールドワークを実施 …p.30 ● 2019 年度「京都の伝統産業演習報告展」を開催 …p.60 ● 「手仕事の学校」vol.07：「和紙 —— 紙漉きの現場から」を開催 …p.46						
2020年度 Academic Year 2020							2021						
4	5	6	7	8	9		10	11	12	1	2	3	
● フランス国立社会科学高等研究院 (École des hautes études en sciences sociales - EHESS) 刊行誌『Techniques & Culture (技術と文化)』主催の学会にて人類学者フレデリック・ジュリアン氏との共同研究成果を発表 …p.30 ● 「工芸文化データベース」を一般公開 …p.56							● 国立研究開発法人 科学技術振興機構主催「サイエンスアゴラ 2020」にて魚革研究について発表 …p.40 ● 国立台北芸術大学 国際講座シリーズ「Ecology, History and Cultural Heritage (生態系・文化遺産・知識生産)」にて、水質と伝統工芸に関する研究を発表 …p.64 ● 国立台北芸術大学と基本協定を締結 …p.85 ● アジア太平洋無形文化遺産国際情報ネットワークセンター (ICHCAP) 主催の無形文化遺産保護研究会 (APHEN-ICH) にて日本の漆産地の現状について発表 …p.58 ● シンポジウム「Things — 工芸から覗く未来」を開催 …p.17 ● フランス南部の植物園「ドメヌ・ド・レイオル」での展示「楮とマンガとフィールドワーク —— 日本の紙漉きの現場から」を一部オンライン公開 …p.30						

シンポジウム 2019 | Symposium 2019

We — The Future Seen Through Craft

We — 工芸から覗く未来

2019年9月に、KYOTO KOUGEI WEEK（京都府事業）との共催でシンポジウムを開催いたしました。工芸を起点にこれからの世の中を考えよう、という大きなテーマのシンポジウムに150名もご来場くださいました。事前申し込みが必要だったにも関わらず多くの方々にお越しいただいたのは、やはり多くの方にとって「工芸のこれから」と「私たちの未来」が大きな関心事だったからだと思います。そのふたつはどこかで繋がっているのではないのでしょうか。シンポジウムは4時間を超える長丁場となりました。登壇者は計10名。関係者やスタッフを入れると会場には200名ほどの人がいました。会場になった京都国際マンガミュージアムはもともと小学校だった建物です。かつて講堂だったその場所で、200名が同じ議題を懸命に考え話し合いました。

伝統産業イノベーションセンター×KYOTO KOUGEI WEEK 2019

シンポジウム「We — 工芸から覗く未来」

日時 2019年9月1日(日) 13:00—17:00

会場 京都国際マンガミュージアム1階 多目的映像ホール 京都市中京区烏丸御池上ル

主催 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター

共催 「KYOTO KOUGEI WEEK」実行委員会

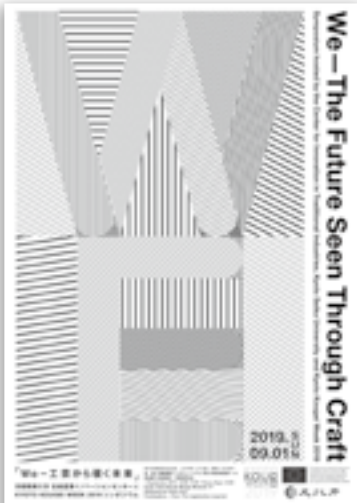
協力 文化庁、京都府、京都市、京都商工会議所

参加費 無料(事前申込制)

.....

同時通訳 Art Translators Collective(田村かのこ、相磯展子、樺山智子)

..... 伝統産業イノベーションセンター センター長 / センター員 / 特別共同研究員 略歴詳細はp.80



第1部 | ファッション素材としてのフィッシュスキンと京都の染色技術

登壇者

Elisa Palomino ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 ファッションプリント学部教員

松山一成 松山染工

小北光浩 京都精華大学ポピュラーカルチャー学部 ファッションコース教員

モデレーター 米原有二

第2部 | 手仕事の、次の1000年のために／

ディスカッション「未来へのバトン」

登壇者

金谷勉 有限会社セメントプロデュースデザイン代表取締役／クリエイティブディレクター

中川周士 中川木工芸比良工房 主宰

永田宙郷 合同会社ててて協働組合 共同代表／プランニングディレクター

八木隆裕 茶筒老舗 開化堂六代目

中村祐太 京都精華大学 芸術学部教員

米原有二

モデレーター 鞍田崇 哲学者／明治大学理工学部准教授

We — 工芸から覗く未来 | 第2部 | 手仕事の、次の1000年のために／ディスカッション「未来へのバトン」 | より抜粋

登壇者 金谷勉 | 中川周士 | 永田宙郷 | 中村祐太 | 八木隆裕 | 米原有二

モデレーター 鞍田崇 Photo: Tatsuki Katayama

野蛮さと切なさ

中村 今回のシンポジウムの事前打ち合わせを(鞍田、中村、米原の)3人でしたときに、「本来、工芸ってもつと野蛮なものですよね」と話したんです。あえて「野蛮」という言葉を使いました。僕自身の感覚としては、現在における伝統工芸がなにかとても洗練されたかたちで進んでいるような気がしていて。けれど、おそらく「工芸」という言葉には、野蛮さや幼稚性みたいなものも同時にはらんでいただろうし。そこらへんの感覚が、僕の工芸観のスタートにあります。たとえば、戦前の民俗学者に今和次郎という人物がいるんですけど、柳宗悦らの民藝とはちょっと違う位置で工芸を捉えていた人です。今は、1916年に柳田國男たちが立ち上げた「白茅会」という会に参加します。彼らは、都市の生活空間がどんどん近代化していくなかで、忘れ去られていく農村の民家を調査しました。今はさらに生活の道具やちょっとした工作などにも関心を寄せ、スケッチで記録していきました。そして、1922年に『日本の民家』という本にまとめるんですが、その解説を藤森照信さんが書いています。すごく簡単な言葉なんですけど、「人と物との初原の関係の面白さと切なさ」というのが、今和次郎がやりたかったことだと記されていました。



商品は長生きする

八木 うちの老祖父ちゃんの頃に「開化堂」を「開花堂」にした偽物が出回ったということがあったそうです。お祖父ちゃんは「これで本物になった」と言って放っておいたという過去があります。それぐらいお茶筒というのは一般的なものかなと。そのなかで、商品は長生きします。僕たちよりも長生きをしていくので、そこにあるべき本来の価値というものをいかに伝えるのか、それをいかに次の代に渡していくのかということも、大事なことなのではないかなと思っています。(テーブル上の)あちらに置かれている黒いお茶筒は、もとは銀色のブリキのお茶筒がちょうど100年以上経ったものです。100年前とまったく同じものをつくっているというのが、うちの会社の大きな特徴でもあります。今回のテーマは1000年。1000年前は平安時代ぐらいかな。そこから現在を考えたりすることの大切さ。うちで言うと、100年前のお茶筒から現在を考える。または、現在お茶筒を買われた方が100年後に(修理のために)お茶筒を持って来られるだろうと考えます。そのときのために何をしていくのか。それは、つくり手として「らしさの継承」かなと考えています。その「開化堂らしさ」は、言葉ではなく、日常のなかで伝わっていくものだと思います。もうひとつ大切なことがあると思っています。それは「伝えること」です。

買っていただくお客さまや使っていただく方に対しては、お茶筒だけではなく時代とともに変わっていくものを提示すべきだと考えています。開化堂でいえば、カフェであつたり、コーヒー缶やバスタ缶であつたりがそれにあたります。いろいろなものをつくりながら枝葉の部分を賑やかにして、幹であるお茶筒を見てもらえるようにする。そうすることによって、自分が死んだ後も先のことも見渡しながらかものづくりをしていく。今回のテーマである「We」にも関わっていますが、こうした取り組みが、長い時間軸でのなかでの「継承」につながるのではないかなと思っています。





新しいものづくりの生態系をつくる

永田 || この1000年、とくにこの100年はどうしても合理性や効率性を追い求めた結果、工芸と言われるものが機械産業だとか情報産業には追いついてはいけなくなって捨て置かれてしまったという状況でした。そのときに工芸は、果たしてはかの合理性、効率性の産業と同じような問題解決をするべきなんだろうかと、ちょっと思ったんですね。だから、問題を解決するのではなく、問題を愛するとも言うんでしょうか。たとえば(経済規模が)小さくなるということとを、「自分たちが気を遣わなくていい人たちが増える」と前向きに捉える方法もあるんじゃないかと思ったんです。

今、わざわざ規模を大きくするのではなく、今ある姿を大切に、適切に、自分たちが生き残れる(経済規模の)サイズを、もう一回つくり直してみようと思いました。自分が主催しています「ててて見本市」というものがあります。これは、各地の伝統的なものづくりの方もいれば、そうではないけれども、ほぼ伝統産業と変わらないような規模で、さ

やかに続けているものづくりの方々を集めて、パイヤーの方とユーザーの方を繋ぐ催しです。だから、「ててて」は「つくり手」と「使い手」と「伝え手」の3方が集まる場としてつくりました。自分たちだからこそできる、サイズに左右されずに続けられることができる方法を探そうというところなんです。それに、大きな産業で同業者で集まると、だいたい愚痴かねたみの話になりがちなところなんです。同じ地域の人だと色んなしからみもあるのでどうも腹が割れないところもあります。

そこで、あえて異なる産業の、異なる地域の方々を1カ所に集めることで情報と知恵の交換をしてみようと思いました。ソリューションではなくてリンケージ

(linkage)と言いますか、縁と由来を重ねていく場を生み出そうというのをやっています。これまで伝統産業というどうしてもユーザーと生産者、メーカーさんの話が多いなかで、もうひとつ「つなぎ手」の重要さがあると感じています。伝統産業のこれからの100年、1000年を見ていくなかではなおさらだと思います。

商人を増やす

金谷 || 各地で製造業・ものづくり業界の課題として感じるのは、以前は「問屋さん」と言われている人が、きちっと職人さんたちと共にあった。企画を組んだり、世の中に流通していくための仕組みをちゃんと担った人たちがいらっしやっただけで、「商人と職人の関係」が成り立っていた。だから、職人さんはものづくりに専念できていたわけですね。それが今、(職人さんが)外に出て、売りに行かないといけなくなっている現状がどこの産地にも起きている。今後も



商いをずっと営み続けられるのか、となったときに(将来は)もう難しいから離脱していく人たちが出てきているのが現状。事業も、ものづくりも一緒やと思うんですけど、過去に(方法を)更新をしていなかったことが問題なんですよ。ツケが回ってきた、という言い方は変かもしれませんが、今の世代に「どうしたらええんか」という課題がズシツときていて。息子や娘たちにこのままの状況では「じゃあよろしく」って投げ渡してしまっただけで済むのかと。

全国各地に行きますが、どこもやっぱり同じ課題なんですよ。地域を強くする仕組みもなければ、八木さんのおっしゃったように仲間も少ない。つくり手はどんどん増えてきているけれど、僕や永田くんのような間接の伝え手や繋いでいくという人間がまだ増えていないんですよ。一定数はなんとなくいるな、とは思いますが、めちゃくちゃ増えているという印象はないよね。東京の人間が地方に行って、お手伝いをして、予算がなくなったら帰るという。このパターンをずっとやっていても地域は強くないからね。この間、信用金庫からそういう取り組みができないかという話がありました。地元でプロデュースをする商人を生まないと、つくり手は結局また孤立化していく。そうさせないようにするためには、地域のなかに必要な要素の人たちも誕生させていかないと。(現状でも)うまくいく人たちがいらっしやと思うんですけど、やっぱり商人が増えていないのは非常に気になりますね。



海外で感じたクラフト

中川 || 僕は京都精華大学の卒業生で、在学中は立体造形専攻にいました。いわゆるコンテンポラリーアートの金属彫刻をしていました。そして、家業が木桶職人という環境のなかで生まれ育ち、今は木桶の職人をしています。この数年、とくに海外で木桶を発表するチャンスがすごく増えています。ヨーロッパにおけるアートと工芸に対する扱い方が大きく変わっているように感じます。とくに2000年頃からのこの20年間でですね。

2000年頃までは海外、とくにヨーロッパのギャラリーにおいてコンテンポラリーアートというのは絶対的なキングでした。工芸はそのずっと下に位置していました。そんな縦の序列は確かにあった。だから、当時はフランスのギャラリーで工芸の話をして誰も話を聞いてくれないみたいな環境でした。

ところがここ数年、コンテンポラリーアートを扱うようなギャラリーが工芸を扱うようになってきた。たとえば、僕や八木さんが参加した展覧会がおこなわれたニューヨークのPace Galleryは世界でも屈指のコンテンポラリーアートギャラリーです。そうした場所で日本の民藝をテーマにした展覧会がおこなわれる。そこでは杉本博司さんとコラボレーションした作品を展示していただきました。昔だったら箸にも棒にもかからなかったもの(工芸)の位置が大きく変化している。縦の序列が横並びになってきたような。そして、今では工芸が

アートの上にあるのではないかという勢いまでも感じます。この要因のひとつは「アートマーケットの変化」じゃないかと思うんです。いわゆるコレクターのお金ですよ。それがコレクションしにくいアートばかりになってしまった反動じゃないかと。20世紀の後半から、アートがインスタレーションやコンセプチュアルアートに重心を置くようになった。それまでの、作品コレクションするようなアートから、コンセプトや空間をコレクションしていくようなアートへの変化になった。それは、やっぱりコレクターとしては物欲というか所有欲を満たせない部分があるのではないと思う。インスタレーションなどは場所との関係性もあって、場所そのものは買えないという難しさもある。そうした状況のなかで、アートマネーというものが工芸のほうに流れ込んできたんじゃないかと感じています。その証拠に、というわけではありませんが、ここ数年、世界の各都市でいわゆるクラフトウィークが始まっています。僕も出品したロエベ(LOEWE)のクラフトプライズは2017年第1回でした。今回、会場に展示されている作品はその第1回でファイナリストになったときのものです。アートプライズやデザインアワードみたいなものというのはもう10年も20年も前からあったのに、なぜ今、クラフトアワードやクラフトプライズがスタートするのか。そこには「工芸の価値」の高まりが要因だと思うんです。

また、それとは別の動向として、国内でのクラフトアワードの増加はオリンピックを中心とした補助金の導入による政府主導ですよ。そういったある種のブームという意味があるので、世界の工芸ブームと日本の工芸ブームって、まったく



文脈が違うというふうに考えています。そして、僕らはこれからどちらを選択していくべきなのか、ということを考えています。工芸に広い領域があるなかでコレクターアイテムになるような領域と、使っていくという領域がそれぞれあると思っています。そこがひとつにできないから、工芸が工芸であるというか、その多様性というのを認めながら次の時代に行かなくてはいけない。

もうひとつ付け加えて。僕はアートからクラフトへという時代の流れというのは、今回の(シンポジウムのタイトル)「We」の考え方にも繋がると思います。アートというのは、結局、個人の表現なんですよ。そして、工芸は私たちが共有していくもの。たとえば、八木さんのところはもう6代続いて、「6代前から同じ茶筒をつくっていますよ」という時間軸の流れがあります。そうして代を重ねた共有であったり、お客さんとつくり手が「お誂え」というかたちでひとつのものをつくっていったり。僕はクラフトの人間としてデザイナーとコラボレーションしますが、そうすると、アーティストの友達から「おまえはよく人が考えたものを作れるよね」と言われることがあります。でも、僕にとってはそれは不自然なことではない。アーティストにとつたら人の考えたものをかたちにするなんていうものはあり得ないという話やと思うんですけども。やはりクラフトは「We」の表現に近づいていく。

ピカソの2代目は存在しない。それがたとえ息子であっても、やはりピカソのフェイクだと思う。でも工芸の場合は2代目、3代目と襲名して、(技術と)名前までも受け継いでいくこともあります。今まさに「共有の時代」という時代背景を僕はベースにしているんじゃないかなというふうに考えます。

Artisan

中川 日本には「職人」という言葉がありますし、かなり近い意味で「工場のおっちゃん」という言葉もあります。要するに、「Worker」と「Artisan」で明確に区別しているのがヨーロッパで、そこは混じりあうものではないというふうに考えられていて感じます。むしろ海外のほうがそこが、水と油のように大きく分かれているなという印象を受けます。

中村 ウィリアム・モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に繋がるとかと思いました。ウィリアム・モリスが「民衆の芸術」という講演を学生に向けてしているんですけども、そのなかで「古い時代の教会は誰が建てたのか」という問いを学生向けます。農村に建築家という職業がない時代。つまり、職人として働いた石工や鍛冶屋が建てたんだと。そして、モリスはその職人たちの働きについて、目と、手と、最後に重要なのは、労働に対する喜びだといいます。「労働」って日本では、すごくネガティブなイメージを持つ言葉だと思うんですけど。工業か、工芸かという話では、つくることを「労働」という言葉に置き換えていくと、工業と工芸は地続きのような気もする。けれど、美術家や彫刻家は仕事を「労働」という言い方はおそろしくない。多分、「制作」と言いますよね。こうして「労働」という言葉から考えても、工業と工芸は非常に近いものかなと思います。

米原 「仕事」って言いますもんね。工業でも工芸でも現場の職人さんたちが自分の姿勢を指す言葉として「仕事」が使われる。「仕事」は作業を指しているし、ものの出来を指している。動作や暮らし方、人との接し方みたいなことも含めて。端的でいて的確に姿勢を表した言葉だなと思います。この言葉を使う人の、人としてのあり方をすごく表しているし、良い言葉だなと思います。「Work」では伝えきれないものをたくさん含んでいる。

永田 同じことかもしれませんが、「手間暇をかけて」と言うじゃないですか。あの言葉はすごく良いなと思っていて。手間だけじゃなくて暇もかけるわけでしょ。やっていないところも含めて、ひとつの完成形を目指す行為。だから、生き方に近いところを担っている。ご飯を食べるための労働なのか、対価を得るものなのか、自分の成功を目指していくものなのか。その大きな差があると思います。工業と工芸というよりも、その人のあり方として。

鞍田 働き方の違いみたいな。

永田 働くための意識というか。何を対価にするかという点では工業と工芸は今、少し違うところがあるのかもしれませんが。似たようなものだと考えるのではなく、「異質なもの」として捉え直すとしたらいいのかもしれない。工業というか、インダストリー 3.0以降の人たちから「手間暇」という言葉は聞いたことがない。皆、「手間をかける」と言いますけど。けれど、インダストリー 1.0、2.0ぐらいの人たちは「手間暇をかけた」と言うんですよ。「暇」まで含めてものづくり。「暇」がものをつくる時に必要なんだという意識は彼らにあるんじゃないかと思います。

自然と工芸

米原 今、国産漆(の生産)を増やそうという気運があります。かつて漆の産地だった各地域で、漆の木を植えて、10年、15年生育して樹液を取って漆にしようと。どこも50年ぐらい前に途絶えたのを復活させようという運動が日本各地でおこなわれています。京都だと丹波の漆が有名です。昔と違うのは、人間が住むエリアがどんどん里山を侵食しているところ。昔は漆の木を植えていた場所でも、今は近隣の住民の方から「かぶれるからやめてほしい」と反対される。漆の植樹をする人たちにとっては、漆の木はかつての産業や土地の記憶みたいなものの象徴でそれをもう一度呼び起こしたいからやりたいんだけど、同じ地域で反対する人もいて。これは「We」の話だなと思ったんです。賛成も反対も皆が自分のこととして議論すればいいんですが、こういった議論って止まることが多いんですよね。実際には「この場所は反対があつたし植樹をやめよう」となっている。

それで、漆の木は山のあちこちに点在しているんです。地域の人に許された場所だけに植樹していったらそうだった。漆掻きって1本の漆の木から牛乳瓶1本分ぐらいの漆しか採れないから、漆掻き職人さんは効率を求めてできるだけ近いエリアで作業したい。ただでさえ山のなかを歩き回る仕事だし。でも現実には少し採ったら軽トラに乗って次の山に移動して、ということが続けている。

工芸振興、地域振興が盛り上がる一方で、現場ではそういうことも起きている。これの根は多くの人の感情の問題だから、コミュニケーションでしか解決できない。なかなか一筋縄ではいかないな、と思います。誰も悪くないけどもう少し話しあう努力はしたいですね。利害の主張だけでは解決できないなと思って。難しいですね。

工芸と工業

金谷 さっき自然の話題が出てきたんですけど、かたや、今はAIなどのテクノロジーが次々と出てきているなかで、実は自然に向きあうことと同じだけ僕たちはそっち(テクノロジー)にも向き合わないといけない時代じゃないかなと思っています。そういった分野の人たちと話すと、楽しいことをどんどん工芸の世界に放り込もうとしてきてくれるんですね。彼らは「工芸は気持ちいいものですね」と言う。

鞍田 もちろん工芸は近代社会のなかでインダストリーに取って代わられたフィールドではあると思うんです。どんどん産業化していつて、そのなかで美術的な側面にいくのか、あるいは他のさまざまなアプローチで生き残りを図ってきた結果(が今の工芸)です。

僕が民芸に惹かれているのは、そこでメインストリームとなっていた工業をあえて追わずに、取りこぼされていったものに何とか光を当てようというその姿勢だったんですね。今日、アートよりも今はクラフトが来ているという話もあったんですけど、それってもしかしたら、クラフト／工芸にとって、足元をすくわれかねない状況でもあるのかなと思って。この表現が適切かどうか分かんないけど、負け組だったからこそ遅しさがああるわけじゃないですか。つまり、メインストリームから落伍してもやり直しがきく社会みたいな、別の選択肢を提案してきたところも工芸にはあつたと思うんです。そのときに、「工芸が勝った」とか「これからは工芸だ」と言ってしまうことの危うさも、本当は工芸が持っていたこの近代社会のなかでのポテンシャルを見失いかねないところもあるのかなということは今話の流れで思いました。けっしてAIに向きあうことが間違いだとかと言いたいわけではないんだけどね。

中川 工芸って、やっぱり器なんやなと思うんです。工芸自体がプラットフォームと言ってもいいと思います。さっき僕もアート、クラフトという序列があるみたいなことを言ったけど、むしろ工芸の上にアートやデザインや工業というものが乗っているイメージが正しいと思っています。文明の起こりみたいなものの象徴が工芸。道具を手にする、工芸を手によって、人間は人間になれた。そう考えるとその上に乗っているアートやデザインや工業は、工芸というプラットフォームに上積みされた部分じゃないかな。だから、そこ(工芸／アート／デザイン／工業)を横並びに考えるということが問題なんじゃないかな、と思います。





床の間の桶

中川 〓 「ハレとケ」という表現があるように、木桶って、30年ぐらい前までは工芸でもなかった。いわゆる民具の世界。うちのお祖父ちゃんがよく言っていたのは、「桶は土間づかい」だと。要するに、畳の上でも、食卓の上にも乗らない。土間に置いて使うもの。それを、「床の間に飾れるような桶をつくりたい」とお祖父ちゃんたちが頑張ってきた。一方で、西陣織のように古くから「雅の世界」の工芸もある。貴族の装束をつくっているような。このふたつの世界観って大きな隔りがある。

中村 〓 工芸って自立したひとつの領域のように語られがちだけれども、今のお話のように工芸品が生活空間のどこに置かれるか、という視点もある。桶が土間にあるのか、床の間にあるのか、と。「工芸の未来」ということを考えたときに、工芸という領域がどんどん先鋭化し、洗練されていくイメージをもっていますが、もって領域横断的にも捉えていくことが大切だと思います。今の中川さんのお話はすごく腑に落ちました。今和次郎も土間にある桶をスケッチに描いていました。

「I」から「We」へ

八木 〓 以前、中川さんと話して出てきたのが、「やっぱり自分自身（『I』）ではなく、『We』のもののづくりだよ」という言葉でした。でも、今あらためて思うのは、ものづくりだけではなく関わり方も「We」であるべきだなと。海外だと、ナショナルトラスト運動のように市民がお金を出して森林を購入して保全するというようなこともあります。一方で、今の日本では森林に手を加えることが続けられていて、無償で自然を守ることができていない。人と自然、人と人が繋がっていくこと。そこは工芸にできる役割だと思いますし、そういう意味でも「We」はとても大事。ただ、パブリックな意味だけの「We」ではなく、工芸の場合はそこにちっちゃな「i」があるんじゃないかなとも思います。大文字の「I」ではなく「W」と「E」の大文字の間に小文字の「i」ぐらいの、ちっちゃな自分自身というのがあって「WiE」。その「i」のことをずっと考えながら自分の代を生きて、その「i」が消え去っていくときに、次代に（バトンを）渡していくというか。そういうことを考えたときに、日本人としての公共性が、工芸に関わり生きていくという部分にもあるということを感じました。こうしたことを何かしら世の中に残せるのではないかな、と少し思いました。

シンポジウム2020 | Symposium 2020

Things ― The Future Seen Through Craft

Things ― 工芸から覗く未来

2021年2月に、KYOTO KOUGEI WEEK（京都府事業）との共催で第2回となるシンポジウムを開催しました。前年に続き自然環境やプロダクトデザイン、教育、職人文化など多角的な視点からこれからの工芸のあり方を社会に提示する内容をめざし議論をおこないました。

伝統産業イノベーションセンター×KYOTO KOUGEI WEEK 2021

シンポジウム「Things ― 工芸から覗く未来」

日程 〓 2021年2月19日〈金〉・20日〈土〉・21日〈日〉
時間 〓 各日15:00―17:00／17:30―19:30の2部構成
主催 〓 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター
共催 〓 「KYOTO KOUGEI WEEK」実行委員会
協力 〓 文化庁、京都府、京都市、京都商工会議所
運営支援 〓 MTRL KYOTO
参加費 〓 無料・オンライン開催（要事前申込）

〓 …… 伝統産業イノベーションセンター センター長／センター員／特別共同研究員 略歴詳細はp.80

2021年2月19日〈金〉15:00―17:00

アウト・オブ・民藝「世界の民芸玩具と玩具趣味のネットワーク」

登壇者 〓
中村裕太 京都精華大学芸術学部教員 〓 | 軸原ヨウスケ デザイナー
尾崎織女 日本玩具博物館学芸員

……………

「なぜこれは民藝じゃないの？」

民藝運動にまつわる出来事や人物、時代、こぼれ落ちたものやことを縦横無尽に考察する「アウト・オブ・民藝」（軸原ヨウスケ／中村裕太）が、「玩具」をテーマに語りました。『世界の民芸玩具 ― 日本玩具博物館コレクション』の著者、尾崎織女氏を迎えて、各地の文化に色濃く影響を受けた玩具の世界を覗きました。

2021年2月19日〈金〉17:30―19:30

ものづくりと生態系

登壇者 〓
王智弘 総合地球環境学研究所 研究推進員 | 堤卓也 堤浅吉漆店 専務取締役 〓 | 松山幸子 一般社団法人パースペクティブ共同代表 〓
永原 稔 inBetweenBlues 代表／阿波藍プロデューサー／国際環境NGOサーフライダーファウンデーションジャパン ディレクター
辻徳人 株式会社デカンショ林業 | 西禎恒 道具の作り手／木工指導者 | 米原有二 〓

……………

伝統的なものづくりの素材や道具のほとんどは自然材。持続可能なものづくりについて考えるとき、自然環境の維持や地域の人的ネットワークとともに考える必要があります。そうした環境をめぐる人・物・事の繋がりを「生態系」と位置付け、現在各地でおこなわれている取り組みについて共有しました。



2021年2月20日(土)15:00―17:00

工芸とデザイン・流通

登壇者

金谷勉 有限会社セメントプロデュースデザイン 代表取締役社長／クリエイティブディレクター

淡田明美 京都精華大学デザイン学部教員 | 白水高広 株式会社うなぎの寝床 代表取締役

小林新也 合同会社シーラカンス食堂／MUJUN代表社員・クリエイティブディレクター・デザイナー／株式会社OneGreen取締役・チーフデザインオフィサー

いかにすぐれた技術から生まれた物であっても、デザインや流通、販売といった視点がなければ、それを求める人の手にちゃんと届きません。本セッションでは各地で工芸のデザインや流通に関わる方々から、いま現場で起きていること、これからの課題についてお話いただきました。

2021年2月20日(土)17:30―19:30

地域を活かす工芸

登壇者

山崎伸吾 ディレクター／音楽家 | 新山直広 合同会社TSUGI代表取締役

永田宙郷 合同会社ててて協働組合 共同代表／プランニングディレクター

北林功 COS KYOTO株式会社 代表取締役コーディネーター／一般社団法人Design Week Kyoto実行委員会 代表理事

岩井巽 株式会社金入／東北スタンダード ディレクター | 高須賀活良 ハタオリマチのハタ印 総合ディレクター

近年、オープンファクトリーなどを中心に「職人技」や「伝統文化」が地域振興と結びつく事例が増えています。工芸を広い視点で捉え直し、あらためて地域の文化資産であることを考える機会も増えました。本セッションでは、各地の生活・文化に根ざした工芸の新たな展開に関わる6名がそれぞれの事例を紹介し、今後の展望を語りました。

2021年2月21日(日)15:00―17:00

伝統文化を教育に活かす

登壇者

江明親 国立台北芸術大学大学院建築文化財研究所 専任副教授

井上葉子 ベニントン大学視覚芸術学科／パブリックアクションセンター 兼任教員

清水貴夫 京都精華大学人文学部教員／総合地球環境学研究所客員准教授

グラハム・エラード ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校ファインアート教授 | 米原有二

逐次通訳 Art Translators Collective(田村かのこ、横山智子)

京都は伝統の街。学生たちにとって伝統文化は「活きた教科書」です。本セッションでは、イギリス、台湾、アメリカ、日本の各大学の事例をもとに高等教育における伝統文化の位置付けや課題点などについて共有しました。

2021年2月21日(日)17:30―19:30

手仕事にみる「職人性」

登壇者

鞍田崇 哲学者 | 八木隆裕 茶筒老舗 開化堂六代目 | 中川周士 中川木工芸比良工房 主宰

谷口弦 名尾手すき和紙七代目 | 桐本泰一 輪島キリモト七代目

伝統的なものづくりを担う職人が先人から受け継ぐ無形の「職人性」。「代を継ぐということ」「地域に根ざす意味」「美術と工芸について」「作家と職人の境界は」、さまざまなテーマから現代の職人の「職人性」について考えました。

研究活動

Research

伝統産業イノベーションセンターの研究活動は、様々な研究分野の方々との協働作業を通して、工芸や伝統産業を継承し、持続可能なものとすることを目指しています。職人、科学者、哲学者、文化人類学者、漫画家など、多様な領域に属する方々の関心とまなざしと技術が交差する場所となることで、「伝統」を捉え直し、その「未来」を発明するための学際的なプラットフォームを作り出しています。

Research on Munemaro Ishiguro

石黒宗麿研究 ――陶芸界の巨人、石黒宗麿の足跡に学ぶ

近代陶芸を代表する陶芸家、石黒宗麿(1893-1968)が晩年を過ごした工房兼住居「八瀬陶窯」には、作陶生活の痕跡が往時のまま残っています。この土地・建物は、関係者とご遺族からの寄託により現在、京都精華大学が維持管理をおこなっています。登り窯周辺から発見された数百点もの陶片は、石黒の試行錯誤の激しさを私たちに伝えます。数えきれないほどの失敗から生まれたひと握りの成功が、当時の、そしてその後の陶芸界に大きな影響を与え続けています。近代陶芸界の礎を築いた石黒宗麿。その手仕事の痕跡は、没後50年を経て、若き学生の学びや研究活動として息づいています。



八瀬陶窯および陶片と石黒宗麿の活動に関する調査研究

京都精華大学 萌芽的研究助成 2018-2020

【研究者】

米原有二 研究代表者／伝統産業イノベーションセンター

奥村博美 芸術学部

斎藤光 ポピュラーカルチャー学部

兼松佳宏 人文学部

中村裕太 芸術学部

石黒宗麿 ISHIGURO Munemaro | 1893―1968

1893(明治26)年、富山県射水郡作道村(現射水市)に医者の子として生まれる。25歳の頃に見た曜変天目茶碗の美しさに感銘を受け陶芸家を志す。東京、埼玉、金沢と転居しながら作陶を続け、1927(昭和2)年に京都市東山区に居を移す。天目軸を中心に東洋古陶磁のさまざまな技法研究に取り組んだが特定の師にはつかず、古陶磁を教材として製陶研究に動んだ。1936(昭和11)年には京都市左京区八瀬に築窯した住居兼工房である「八瀬陶窯」で作陶を始める。1955(昭和30)年、鉄軸陶器の技法で重要無形文化財保持者(人間国宝)認定を受けた。1956(昭和31)年に八瀬陶窯を財団法人化し、後進の陶芸家養成の拠点づくりをめざした。

/展示/

京都精華大学50周年記念展

「石黒宗麿と八瀬陶窯 ―五〇年目の窯出し―」

会期 2018年12月14日(金)―2019年1月12日(土)

開館時間 11:00―18:00

入館料 無料

会場 京都精華大学ギャラリーフール

主催 京都精華大学

協力 射水市新湊博物館、銀座 黒田陶苑、金田正夫(有限会社無垢里)、

木立雅朗(立命館大学)、黒石いずみ(青山学院大学)、

坂部真理(株式会社環境事業計画研究所)、田畑幸嗣(早稲田大学)、

ナワビ矢麻(早稲田大学)、余語琢磨(早稲田大学)

企画 京都精華大学 八瀬陶窯研究会(米原有二、奥村博美、斎藤光、兼松佳宏、中村裕太)

実行委員会 小野公久、木村盛伸、黒田佳雄、鯉江良二、清水保孝、

馬場弘吉、原清、森口邦彦



京都精華大学が取り組んできた陶芸家 石黒宗麿に関する調査・研究の成果として、石黒の工房兼住居跡「八瀬陶窯」(京都市左京区)の登り窯から発見された本人作と思われる「木葉天目茶碗」や工房跡に残された陶片などの資料を展示。石黒宗麿が生涯をかけて追い求めた作陶を探りました。

※ 木葉天目茶碗

2018年6月、八瀬陶窯研究の一環として実施した登り窯測量調査において、窯内から石黒作とおもわれる「木葉天目茶碗(このはてんもくちやわん)」が発見された。本作品は焼成時に容れる「匣鉢(さや)」に納められた状態で残っており、焼成時に匣鉢と作品の付着を防ぐための目土も付いたままだったことから、石黒宗麿の未発表作の可能性が高いと考えられている。本作品においては未解明な部分も多く、今後さまざまな機関と協力して全容の解明を進めていく。

|関連イベント|

オープニングトーク「八瀬での石黒宗麿を語る」

開催日 2018年12月14日(金)

登壇者 小野公久(陶芸ジャーナリスト)、木村盛伸(陶芸家)、清水保孝(陶芸家)、

馬場弘吉(陶芸家)、森口邦彦(染色家)、奥村博美(芸術学部教員(当時))、

米原有二(伝統産業イノベーションセンター長)

八瀬陶窯 探訪ツアー

開催日 2019年1月12日(土)

※ 八瀬陶窯 Yase Toyo Kiln

1936(昭和11)年、石黒宗麿が43歳のときに京都市左京区八瀬に築窯。以後、暮らしと作陶の場として晩年までを過ごす。庭にはさまざまな木々や草花が植えられ、自然の景色をこよなく愛した文人・石黒宗麿の横顔を今に伝える。2003年から京都精華大学が管理をしている。



Photo: 表恒匡



Photo: 中島光行

/展示冊子制作/

京都精華大学50周年記念展「石黒宗磨と八瀬陶窯 ―五〇年目の窯出し―」の記録冊子には、展示風景のほか、オープニングトークでの対話や、関係者・研究者による寄稿が収録されています。



/陶片研究/

八瀬陶窯に遺された陶片群は、石黒宗磨の試行錯誤の痕跡。石黒宗磨はひとつの技法にとどまらず、東洋古陶磁のさまざまな表現に挑戦し続けました。八瀬陶窯からは、これまでの調査で2000点を超える陶片が発見されています。陶片は釉薬・技法ごとに分類しさらなる研究資料として活用しています。石黒本人が失敗作と断じて割った陶片のひとつひとつが、真摯にものづくりに向きあう石黒の精神性を伝えています。



/京都国立近代美術館への陶片提供/

京都国立近代美術館 感覚をひらく ―新たな美術鑑賞創造推進事業
エデュケーショナルスタディーズ02「中村裕太 ツボノナカハナンドロナ?」

会期 2020年12月24日(木) ― 2021年3月7日(日)

開館時間 9:30―17:00

会場 京都国立近代美術館 4階 コレクション・ギャラリー

特別協力 京都精華大学伝統産業イノベーションセンター

本展は、作家(Artist)、視覚障害のある方(Blind)、学芸員(Curator)がそれぞれの専門性や感性を生かし、さまざまな感覚をつかう鑑賞方法を創造する「ABCプロジェクト」のひとつとして企画されました。石黒宗磨《壺「晩秋」》(京都国立近代美術館所蔵)と石黒宗磨陶片26点(京都精華大学所蔵)を活用して、新たな感覚・鑑賞方法のかたちを探りました。



| 研究対談 |

八瀬陶窯研究会の活動を振り返って

米原有二 人文学部教員／伝統産業イノベーションセンター長 十 中村裕太 芸術学部教員／伝統産業イノベーションセンター員

2018年度から2020年度にかけての八瀬陶窯研究会の活動と今後の展望を、「人物」「八瀬」「陶片」という3つのキーワードから振り返る。京都国立近代美術館で開催された「中村裕太 ツボ_ノ_ナカ_ハ_ナンダロナ?」展の会場にて、米原有二と中村裕太による対談を収録。

石黒宗麿研究の始まり——京都精華大学ギャラリーフロールでの展示について

米原 2018年に石黒研究会が始まったときに、石黒宗麿の人物像、石黒宗麿の工房と住居跡の八瀬陶窯、そして石黒宗麿が残した陶片、これら3つを研究の柱として、石黒宗麿という陶芸家を立体的に捉えていこうということを目標としていました。「人物研究」、「八瀬研究」、「陶片研究」という3つの柱ですね。

中村 この研究会が始まる前に、京都精華大学芸術学部陶芸専攻の奥村博美先生が、学生たちと一緒に八瀬の調査をされていました。登り窯の周辺から陶片を発掘し、石黒の陶器作りを技法ごとに分類されていたことがこの研究会自体を立ちあげていくきっかけになりました。

米原 そうですね。500点前後くらいの収集陶片を大きく技法分けしておられたので、それが下地になって発展していったという流れですね。その時点で、「まだ掘るとたくさん出てきそう」ということもみえていましたので、奥村先生、中村先生を中心に掘っていく、あるいは出てきたものを再度分類したり、考えるという作業を進めていったという流れでしたね。

中村 2018年度の研究会の大きな目標は、「石黒宗麿と八瀬陶窯——五〇年目の窯出し——」という展覧会を、学内の京都精華大学ギャラリーフロールで開催することでした。その展覧会を開催するにあ

たって大きな発見がありました。研究会が始まる前ですが、登り窯の匣鉢のなかに入った、完品の木葉天目茶碗が出てきました。これも展示の目玉になるということで、米原さんが様々なところにプレスリリースを出されたりしましたね。そして石黒が亡くなってからちょうど50年という月日もたっていたので、「五〇年目の窯出し」という副題がたてられました。

米原 たまたまですけど、京都精華大学の創立50周年でして、大学の50周年記念展と石黒が亡くなって50年の節目が重なった感じでしたね。先ほどの木葉天目茶碗も、だいぶメディアに取りあげられていたということがありました。ただ一方で、僕らのほうとしては同じ時期にたくさん陶片も出てきたので、そちらの方が見所としては多かったように記憶しています。ギャラリーフロールでの展示は、振り返ってみていかがですか。構成的には、来場者に八瀬という場をまず見せ、ついで銀座の黒田陶苑さんにお借りした完品を陶片と並べて見てもらい、そして次のブロックでは来場者に陶片をそのまま触っていただける展示になっていました。物量で圧倒される展示でもありましたし、最後は木葉天目茶碗を見てもらう構成になっていました。登り窯の模型なども一緒に展示したりしました。



中村 この展示を作っていくにあたって、もちろん人間国宝である石黒宗麿という大きなイメージがついてきますが、実際に鑑賞される方の多くが京都精華大学の学生ということもあって、ただ単に人間国宝展みたいなものにして展示をするのではなく、より身近な存在として感じてもらいたいと思っていました。具体的な展示では、石黒の作品をただ借りてきて並べるというよりも、陶片をメインにして構成し、実際に触れることを見どころにしました。そうした経験をとおして、たとえば陶芸専攻の学生がその陶片のつくりや模様から学ぶべきものもあるだろうし、デザインの学生が図案からなにかを得られることもあるだろうと考えていました。なるべく学生の制作にも近いかたちで、この展示を見せていこうと考えていました。まず、一部屋目では「八瀬に窯を開く」とし、導入として八瀬で石黒が暮らしていた住居や登り窯を記録した映像作品を展示しました。八瀬の主屋は10畳半程の空間なのですが、奥の空間にはその空間に見立てた畳敷きの上がり間を作り、そこに銀座黒田陶苑さんからお借りした石黒の作品と、それに類似する陶片を並べました。そして陶片には実際に触れていただくことができるようになっていました。来場者は陶片に触れながら、石黒の作品を眺めることができるように構成しました。

二部屋目は「石黒宗麿の陶器作り」としました。石黒の陶器作りの傾向として、ひとつの技法をずっと長年やっていくというよりも、中国や朝鮮の古陶磁をひとつの手本としながら、バリエーションを持って制作をしていくということがポイントになっています。およそ500点の陶片を展示台の上にザーッと並べることでその陶器作りのバリエーションの豊かさを体験してもらう構成にしました。

最後の部屋は「五〇年目の窯出し」とし、当時使っていた窯道具や、油土によって作られた登り窯の模型を展示し、最後に木葉天目茶碗を鑑賞してもらうという構成にしました。石黒の陶器作りと八瀬での生活を追体感してもらえるような展示構成にしました。また、立命館大学の木立雅朗先生を中心にしておこなわれた八瀬の登り窯の測定の成果も展示していただいたことで研究的な側面も展覧会に組み込むことができました。

石黒の研究会を広がりをもって調査していく下地作りができたのが、一年目の成果だったと思います。
米原 実際ギャラリーフロールの展示の時はまだあまり「人物研究」自体は進んでいなかったのですが、陶片と場所、つまりものと場所から見ると、石黒宗麿という人物自体についても、新しい像が浮き上がってくるという印象を受けました。展覧会のオープニングトークとして、陶芸家の木村盛伸さんと馬場さん、森口さん、清水さんという関係者の人をお招きして、ありし日の石黒の話をさせていただきました。このときは思い出

「石黒宗麿と八瀬陶窯
一五〇年目の窯出し」
展示風景

Photo: 表恒匡





話を中心でしたが、気難しいイメージが先行する石黒の、すこし人間らしい部分が垣間みえるのが興味深かったです。特に染色家の森口邦彦さんは、同業ではないだけに余計に「人間」として、人生の先輩として交際していて、石黒宗麿の人間味あるところが印象的でした。

中村 会期中に八瀬陶窯の探訪ツアーも企画しました。もともと石黒に興味を持たれている方や、展示を見ていただいて興味を持たれた方が、30名くらい参加しました。ツアーでは、八瀬の住居や工房の空間と一緒に見ていきました。振り返ってみても、研究会として一年目とは思えないくらいの成果がありました。

陶片データベースの公開——「失敗作」から石黒を捉えなおす

米原 2年目の2019年にはいと、陶片を発掘することと分類することにくわえて、それまでちよつと手薄だった「人物」に関する部分も、周辺の関わっていた人たちに話を聞きに行くことによって少しずつ広がっていききました。特にパトロンだった方のご息が、2018年の展覧会をご覧ください、繋がりがまた新たに生まれたことが重要でした。それによって、聞きとりによる調査も、これまでよりおこなうことが可能になっていきました。

中村 2019年度の後半は、そうした方々への聞きとりや、所有されている作品や書簡などの調査を計画していましたが、コロナ渦のなかでなかなかお会いできませんでした。そうしたなかでも、京都で石黒のパトロンをされていた方のご息からは、石黒の交友関係に関するお話を聞かせていただいたり、所有されている作品などを拝見させていただくことができました。そうした聞きとりは、この後にお話する京都国立近代美術館での展覧会でも参考にさせていただきました。

一方で、陶片に関しては、2019年度の1月から3月くらいにかけて少人数で発掘をおこないました。2018年の展覧会では、奥村先生が学生達と発掘したものを中心に展示しましたが、その発掘のときにまだ大量の陶片があるということがわかっていたので、陶芸専攻の助手や学生達で陶片を拾い集め、およそ2000点掘り出しました。それも2019年度のひとつの成果だと思います。

米原 陶片は、技法ごとに現在26種類に分類されています。データベースに収録するために現在準備を進めています。

中村 2020年度の大きな成果は、陶片のデータベースだと思います。陶芸の助手の方と協働しながら、新たに掘り起こされた陶片を写真で記録し、採寸をし、それを技法ごとに分けていきました。現在センターの方が、データベースの作成にむけて入力してくださっています。それは、2020年度中の公開を予定して

います。公開することで、さらに研究も多方面に広がっていくように思っています。

米原 「陶片」という失敗作から石黒の技術を捉えなおし、石黒がやろうとしていたことを再考するということは、これまでも研究内容としては掲げていたのですが、データベースとして体系立てられたものを公開することで、やろうとしていたことがすこしずつ前進していくことを期待しています。

陶片に「触れる」——陶片研究の新しい可能性

中村 もうひとつの成果として、伝統産業イノベーションセンターの事業と関連したプログラムとして、2020年12月24日から2021年3月7日の期間に、京都国立近代美術館において「中村裕太 ツボノナカハ ナンダロナ?」という展覧会を開催しました。この展覧会にいたった経緯としては、2018年に石黒の陶片を使った展覧会をおこなったことが大きいです。そのときは学生や一般の方に向けたものでしたが、「陶片に触れる」という鑑賞経験は、もうすこし踏みこんで考えていけるなと思いました。そうした考えを抱いているときに、この美術館が取りこんでいた「文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業 感覚をひらく——新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」という枠組みに出会いました。このプログラムでは、それまでも目に見えない方と協働で展覧会やワークショップなどをおこなっていました。そうしたプログラムのなかで、陶片を用いて、目の見えない方の鑑賞経験をより豊かにしていく方法を探っていくことができないかというアイデアを持ちはじめました。

そして、2019年度の終わりにくからアーティストと目の見えない方とキュレーターの三者でプログラムを作っていました。参加いただいた視覚障害のある安原理恵さんは、陶器作りもされている方でした。安原さんには、八瀬に来ていただいて陶片を掘りおこすところから参加してもらい、陶片にも関心をもってもらえました。目の見えない方は「観察」ではなくて「触察」という表現をされますが、触れることによって、その物がどういう陶片であるのかということを言葉にしていく様子を映像で撮りました。こうした協働作業によって、陶片自体が、たんに欠片であるだけでなく、作品鑑賞のためのひとつのツールになりうることを、展覧会で感じることができました。展示では、石黒宗麿の陶片のなかから26点を、大学から美術館に貸し出し、それらを来場された方にも触れていただきました。会期中およそ2000人以上の方が陶片に触れました。

米原 安原さんは、映像のなかでもとても丁寧に言葉にされるという印象を持ちました。実際に、その映像を見ながら陶片の断面を触ると、今まで無意識に触っていたものとはまた違う触感がしますよね。

中村 こうした視点は、研究会にとっても非常に意義のあることだと思います。私たちはその陶片の形や模様からいつの時代に作られたのかを観察しますが、それはあくまで視覚的に得られる情報です。けれど、触れることによって得られる情報というのは、陶片を中心とした石黒研究会におけるひとつの醍醐味にもなるだろうし、そういったところへ展開していく研究のありかたも、今後考えていけたらと思っています。

米原 そうですね。今回の展覧会で、これまで僕たちが教科書にしてきた陶片は、今まで想像できなかった使い道がまだある、というのは改めて思いました。陶片の可能性がまだこれから考えられると思いました。

中村裕太
「ツボノナカハ
ナンダロナ?」
展示風景
Photo: 表恒匡





中村 || この展覧会もコロナ禍のなかで、どういう形で開催できるのかが微妙な時期がありました。そこでデザイナーの方にも入っていただきながら、もし展覧会が開催されなかったとしても、陶片の鑑賞経験を展示空間ではなくて、ウェブサイト上でどういう形で展開することができるのかということも話しあってきました。そして、展覧会の開催に合わせて、ウェブサイト「ABCコレクション・データベース vol.1 石黒宗麿陶片集¹」も同時に立ち上げました。たとえば、画面上に映っている陶片をスクロールすると、手で触っているときの音がします。陶片をクリックすると、安原さんが触れているときの映像が流れます。そのあとに僕が執筆した石黒の陶片にまつわる文章、さらにキュレーターによる美術館の他のコレクションとの繋がりが表示されるというウェブサイトになります。したがって、展覧会のウェブサイトというよりも、ひとつのデータベースとして作り上げました。ちなみに今年度のプロジェクトは石黒の陶片でしたが、この先2年間はモチーフを変えながら続いていきます。そのなかで、他のコレクションと陶片がまた違った形で出会っていくことになります。そうした試みは、石黒研究会にも繋げていくことができれば面白いと思います。

石黒宗麿研究のこれから——「人物」と「環境」という観点

米原 || そうですね。あとは「人物研究」をどうしていくか。今年コロナになってできなかったことというと、20年度は2018年のギャラリーフールに相当するようなイベントとか展覧会をしたいなというのがありました。特に八瀬の場所を使って、あるいは石黒の残した陶器を使ってと思っていたのですが、大学の研究会としてはできなくなりました。でも、見方を変えればさつき中村先生がおっしゃったみたいに、展覧会とウェブで、実際に来ることができない人にも伝える方法があるわけで、そこは21年度以降にも続く課題としていきたいなと思っています。

中村 || 今後どのように発展していくかわからないのですが、八瀬を「環境」という観点からも捉えなおしてみたいということがあります。今までは、石黒の住居と工房がある「場所」として捉えていましたけれども、京都の地理において八瀬の「環境」が担ってきた役割を考えてみたいです。たとえば、石黒は八瀬の山に分け入り鳥を狩っていました。そうしたことが陶器作りにどのように影響したかはわかりませんが、石黒は陶器の模様としてよく鳥を描いていたたりもします。あと甗と一緒に連れていた犬もよく描いていたたりします。このように八瀬という環境を通じて石黒の陶器作りを読み解いていくことも、今後できると思います。そうした意味でも、研究会に環境学をはじめとした異なる研究領域の方に入っていただくことは楽しみです。



今後の課題として、陶片についての調査は継続的におこなわれていますけれども、「人物」と「環境」というところは、今後深めていくことができるポイントだと思います。そういった視点をもつことによって、いわゆる美術史的なもしくは工芸史的な石黒像というものだけではなく、より広い石黒像を立ちあげていければと思います。**米原** || 今度、科学研究費助成事業とか総合地球環境学研究所、さつきおっしゃっていただいた自然環境の人たちを研究者チームとして迎えようとしています。もともと、色々な地域で植物の植生研究をしていたりする方々なので、今まで僕たちが見えていなかったことを、しっかり見てくれる人たちだなと思っています。そこにはすごく期待していて、その人たちと一緒に何ができるかなと思っているのですが、中村先生のイメージはありますか？

中村 || たとえば、石黒と妻のとうが一緒に暮らしていたときには、庭に色々な植物を植えていたりとかするんですよね。それが50年経ち、大きく伸びてしまったりしています。石黒の陶器作りは止まっていたとしても、環境はどんどん進んでいきます。そうした整備も今後やっていかないといけないでしょうし、そのうえで、何を残すべきで、何を整備するべきなのかということも考えていきたいです。あと、八瀬陶窯という場所を、今後どういう形で大学が活用していくかということも重要になっていきます。もちろん研究の場であつてもいいでしょうし、学生の工房になつても面白いと思います。地域の方々と交流しながら、その活用方法を探っていく研究をしていきたいです。

¹ | ABCコレクション・データベース vol.1 石黒宗麿陶片集 | <https://www.momak.go.jp/senses/abc/ishiguro/>

Anthropographiks

マンガ人類学

フランス国立科学研究センター(CNRS)との連携事業として、フランス国立社会科学高等研究院(EHESS)マルセイユ校准教授のフレデリック・ジュリアン氏(文化人類学者)を招聘し、「和紙製作および、和紙の活用法」をテーマに合同フィールド調査をおこないました。フレデリック・ジュリアン氏の研究方法である「Anthropographiks(マンガ人類学)」は、文化人類学者とマンガ家(イラストレーター)がともに同じ現場を巡り、論文執筆時には文章とマンガの双方の記録を盛り込みます。伝統産業イノベーションセンターからはセンター長の米原有二、研究コーディネーターの赤尾本織音が研究に参加。また、共同研究者としてイラストレーターのホリグチイツ氏(京都精華大学卒業生)がすべての調査に帯同しました。この研究成果は、2021年にフランス南部の植物園での展覧会および、フランスで刊行される学術誌『WAZA』に論文掲載される予定です。

/講演会/

共同研究にあたり、フレデリック・ジュリアン氏による2回の講演会を開催いたしました。ジュリアン氏が考案した研究方法「Anthropographiks(マンガ人類学)」をもとに、フランスと日本における伝統技術の比較研究についてお話いただきました。本講演は京都精華大学と総合地球環境学研究所の共同プロジェクトである「マンガ・アカデミック研究会」の第2回でもあります。

The Art of Making and the Technical Milieu

ものづくりとわざの現場から

日時 2019年10月10日(木) 13:00—14:30

会場 総合地球環境学研究所 講演室 〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4

言語 英語

参加費 参加無料／申込不要



日本とフランスをつなぐ、あまり知られていない人類学の歴史を紹介しました。1930年代にフランスの人類学者アンドレ・ルロワ＝グーランが実施した京都の「わざ」や技術の調査の成果を糸口に、日本とフランスの物質文化研究における新たな共通課題を模索しました。社会環境(milieu)や身体動作、技術、機能美などのキーワードを取り上げることで、時代や空間を超えて様々な文化のわざの現場に流れる共通の要素に焦点を当てました。

Anthropographiks: an Intersection of Artisan, Scientist and Mangaka's Savoir-Faire

職人と学者、漫画家の出会いが生むもの ―「マンガ人類学」の研究手法を通して

日時 2019年10月10日(木) 16:20—17:50

会場 京都精華大学 黎明館 L-001 〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

言語 英語／日本語(逐次通訳: グラマー裕美子)

参加費 参加無料／申込不要



2016年に始まった「Anthropographiks(マンガ人類学)」プロジェクトは、学術的な出版物における絵やマンガ、写真などの視覚素材の位置付けを問うものです。

本講演では、人類学特有の課題を、より広い読者層に向けてどのように伝えられるか、フランス、アメリカ、日本で制作されたバンド・デシネ、コミック、マンガを例に「Anthropographiks」がもつ可能性を紹介しました。



京都でのフィールドワークをもとに描かれた漫画(全22枚より抜粋) | ホリグチイツ | 2019

フランスでの展示に先立って京都でおこなわれたフィールドワーク4日間の様子



/第3回「マンガ・アカデミック研究会」での発表/

日時 | 2020年9月29日(火) 13:00—15:00

開催方法 | オンライン (Zoom)

参加費 | 参加無料 / 申込不要

共催 | 総合地球環境学研究所「可視化高度化事業」、京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター、
京都精華大学 アフリカ・アジア現代文化研究センター

総合地球環境学研究所と京都精華大学の包括協定のもと発足した「マンガ・アカデミック研究会」にて、フレデリック・ジュリアン氏の「Anthropographiks(マンガ人類学)」と和紙産地調査に関する発表をおこないました。

/フランスの学会参加/

「WAZA」学会に参加

開催日 | 2020年10月23日(金)

会場 | フランス国立社会科学高等研究院(以下 EHESS)マルセイユ校、
フランス国立科学研究センター(CNRS)ノルベルト・エリアス・センター

共催 | ヨーロッパ・地中海文明博物館(MuCEM)、京都大学、京都精華大学

EHESS 刊行の学術誌『Techniques & Culture』の次期号である、「わざ(技)」をテーマにした特集の寄稿者会議に参加しました。フランスを拠点とする研究者と京都大学及び本学から参加した研究者約20名をオンラインでつなぎ、4時間半にわたり寄稿者がそれぞれの論文内容についてプレゼンテーションをおこないました。物質文化、行動科学、伝統文化といった広域における「わざ」を思考する本誌に、人類学者フレデリック・ジュリアン氏との共著で米原センター長が日本の和紙技術に関する論文を寄稿します。2021年秋、出版予定です(論文翻訳・プレゼン通訳: 赤尾木織音)。

/フランスでの展示/

Washi: du Mûrier au Manga, l'Art du papier au Japon

楮とマンガとフィールドワーク ——日本の紙漉きの現場から

会期 | 2021年2月23日(火)——2021年3月14日(日) ※オンライン公開

開園時間 | 9:30—17:30

会場 | ドメーヌ・ド・レイオル(植物園)Avenue Jacques Chirac, 83820 Rayol-Canadel-sur-Mer, France

主催 | 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター

共催 | フランス国立科学研究センター(CNRS)ノルベルト・エリアス・センター、
沿岸域保全整備機構(Conservatoire du Littoral)

漫画翻訳 | 大西愛子



「Anthropographiks(漫画人類学)」では、絵を描く作家(漫画家やイラストレーター)も研究者の一人として、フィールド調査の現場に参加し、自らの体験をもと調査内容を描くという、ジュリアン氏が発案した研究手法です。従来の事後的なイラスト化や視覚化とは異なり、調査の段階から作家が研究に関わることで、学術研究における新たな視覚表現を模索する試みです。今回の研究のテーマは和紙。本学卒業生でイラストレーターのホリグチイツ氏とともに、京都府綾部市の黒谷和紙や、福井県越前市の越前和紙の工房や製紙所を訪問しました。その様子を描いた漫画全22枚が今年仏訳され、フランス南部の植物園「ドメーヌ・ド・レイオル(Domaine du Rayol)」にて、日本全国の和紙産地の地図や、和紙製品(便箋や提灯)とともに展示されました。



Photo: Valeria Tarroni

研究ノート

「Anthropographiks(マンガ人類学)」の手法による伝統産業調査の可能性 ——インタビューとマンガ フィールドワークの視点

米原有二 人文学部教員／伝統産業イノベーションセンター長

Anthropographiks(マンガ人類学)

2019年10月から約1ヶ月間、フレデリック・ジュリアン氏(文化人類学者／フランス国立社会科学高等研究院[EHESS]マルセイユ校准教授)とホリグチイツ氏(マンガ家／イラストレーター)、赤尾木織音(伝統産業イノベーションセンター 研究コーディネーター)と共同で「和紙の製法と周辺の自然環境」をテーマにしたフィールド調査を京都府綾部市・京都市および福井県越前市にて実施した。

フレデリック・ジュリアン氏は、これまで文章と絵、写真、映像、音を研究のあらゆる過程で組み合わせて学術的な記述に立体感をもたせる編集手法の開発に取り組んできた。近年では絵を効果的に用いることに着目しており、イラストレーターをフィールドワークに帯同して研究対象を異なる視点で表現する「Anthropographiks(マンガ人類学)」の手法を提唱している。

本研究では、日本の和紙産地を「近代工業とは異なる技術伝達を有する職人文化の集積地」と定義して和紙産地における技術継承および自然環境に着目したフィールドワークをおこなった。

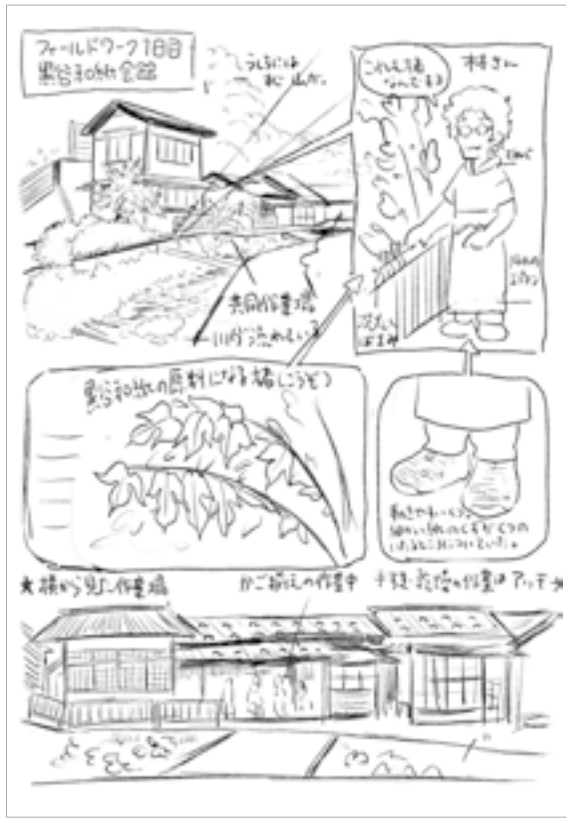
「技術伝達」「自然環境」「産地構造」

筆者はこれまでに伝統産業分野における職人文化、分業制度、技術転用、産地構成について調査研究をおこなってきた。加えて、道具・材料の枯渇問題から出発した「工芸産地における天然材料の確保と自然環境の関わり」については継続的な調査をおこなっている。いずれも調査方法はおもに聞き書き、参与観察でおこなっている。人物(職人)への聞き取りから「作業環境」「技術」「道具・材料」等について記録をおこない、語られる個人的な過去・現在の仕事風景から、産業としての全体像の考察をしている。

今回、フレデリック・ジュリアン氏との共同研究においては、研究テーマの設定にあたり事前に議論、意見交換を重ねた。フレデリック・ジュリアン氏からは日本での滞在研究で「技術伝達」「自然環境」「産地構造」の3点をよくみることができる工芸分野が求められた。

筆者からは和紙を候補に挙げ、なかでも黒谷和紙と越前和紙の二産地に着目した研究を提案した。この二産地は産業規模、技術継承において対照的であり、現在の和紙工芸を考えるに最適だと考えたためだ。結果、今回の研究では、和紙職人の動作から技術継承を、紙漉き工房の周辺環境から歴史を考察することに決定した。

近年、フランス語圏を対象とした人類学研究では、伝統的な職人技と先端技術、またその二つが混ざり合い形成されるサヴォアフェール(ノウハウ、わざ)の調査が盛んにおこなわれている。本研究でも和紙に



フィールドワークをもとに描かれた漫画(下書き) | ホリグチイツ

関連する社会環境(milieu)や身体動作、技術、機能美などのキーワードを取り上げることで、時代や空間を超えて様々な文化に流れる共通の要素に焦点を当てようとしている。今回のフレデリック・ジュリアン氏との共同研究もそうした流れのなかに位置づけられる。

マンガ家とのフィールドワーク

本研究ではすべての調査先にマンガ家・イラストレーターであるホリグチイツ氏が同行した。筆者とフレデリック・ジュリアン氏は調査対象である和紙職人に接近して聞き取り調査をおこなっていたが、ホリグチイツ氏は対象者からわずかに距離をとって工房全体を見渡そうとしていた。このことは、取材対象者との距離を縮めていこうとする筆者やフレデリック・ジュリアン氏とは対照的だった。

マンガ(イラスト)で調査記録を考察するホリグチイツ氏は工房全体を俯瞰し、ときに工房周辺の自然環境までも視野に含みながら、取材対象者を描こうとしていた。

一般的なフィールド調査においてはインタビュー自身が写真や映像を撮影しながら聞き取りをおこなうが、それは聞き取り内容を補足するためのものである。それに対して、マンガ家であるホリグチイツ氏の視点は筆者たちを含めた聞き取り調査そのものも記録としてイラストにおさめようとしていた。

調査終了後には、ホリグチイツ氏と下書きについての意見交換を重ね、研究成果となるイラストに「なにを描くか」と「なにを描かないか」について話し合った。ホリグチイツ氏は工房の隅にある生活用品なども含めて描いており、そうした「視点」を本研究でどのように扱うかが焦点になった。

.....

2つの和紙産地の概要について——今回の調査地となった黒谷和紙(京都府綾部市)、越前和紙(福井県越前市)の概要と歴史、現状について。

黒谷和紙

黒谷は急峻な山々に囲まれた小さな集落だ。「黒谷和紙」は京都府南部地域の綾部市黒谷町と八代町で生産される和紙の総称。楮を主原料とする厚手の和紙は、丈夫で破れにくい特徴を持つことから提灯や和傘など人々の暮らしを支える用具の材料として用いられてきた。また、呉服産業が盛んな京都市内に近いため、呉服の値札や着物を包む畳紙などの需要も多かった。

黒谷和紙は約800年の歴史を持つ。伝承によれば、源氏との戦(「治承・寿永の乱」1180—1185)に敗れた平家の落武者がこの地に逃れ、山中に隠れ住みながら暮らしの糧として紙漉きを始めたという。黒谷和紙の伝承に関する文献は1791年(寛政3年)と1800年(寛政12年)に起きた二度の大火によってほとんど焼失しているため、その歴史については不明な部分も多い。しかし、現存する1593年(文禄2年)の文書に黒谷で漉かれた和紙が用いられていることから、少なくともこの頃には和紙産地として成立していたと考えられる。



「黒谷」の名の通り、斜面が多く稲作には向かないこの地の主産業として発展した。

黒谷ではかつて住民のほとんどが紙漉きに従事していた。1872年(明治5年)におこなわれた調査では総戸数76戸のうち67戸が紙漉きを生業としていた。また、その5年後の1877年(明治10年)におこなわれた職業調査では「紙工67人」「農業5人」「傘工1人」「経師工1人」「僧職1人」「紙売り1人」となっており、農地に乏しいこの地の収入を紙漉きが支えていたことがわかる。黒谷村はまさしく「紙漉きの村」だった。

現代の黒谷和紙

現在、黒谷和紙共同組合に所属する紙漉き職人は11名。高齢化によりほぼ休業状態の職人も含まれ、実際に毎日紙漉き業に従事する職人の実数はさらに少ない。



フィールドワークの様子

黒谷和紙では、原材料である楮の一部を地域で栽培・収穫している。かつては、他の和紙産地と同様に原材料産地から仕入れていたが、楮の収穫高減少、価格高騰を受けて自分達で生産する道を歩んでいる。原材料から品質を確認できるメリットはあるものの、紙漉き職人が農業も兼ねる負担は大きく、産地を圧迫している。

黒谷和紙の活用

黒谷和紙は、地域の紙漉き職人たちが共同で流通、販売をおこなう形式をとっている。これは、かつて洋紙に圧迫されて黒谷和紙存続の危機にさらされた時代に、個人ではなく「組合」という共同体で生き残りをかけた歴史の名残だ。

黒谷和紙の産地である黒谷町、八代町を含む8町を統合した東八田地区の総世帯数は746、人口1,828人(2015年国勢調査)であり、この地域の産業構造、生活の変化が紙漉きの伝承に影響していることがみてとれる。

今回のフィールドワークでは、黒谷和紙共同組合理事長の林伸次(はやし・しんじ)氏への聞き取り調査を中心に実施した。

黒谷和紙は国内の和紙産地のなかでも少量生産地に分類される。それは、少人数による生産体制であることに加え、伝統的な材料と製法を守り続けていることが要因である。昭和(1926—1989)、平成(1989—2019)と国内各地の和紙産地に機械設備が導入されるなかで、「伝統製法にとどまる」ことで生き残りを図った結果であり、このことは後述する伝統文化財修復における需要に繋がっており、黒谷和紙の高価値の裏付けとなっている。しかし、少量生産が招く経済難は慢性的な課題として存在する。黒谷和紙では、和紙の流通・販売、工場の運営、原材料の確保などを共同組合で一括しておこなっている。原資調達と利益分配を共同組合で一元化することで、黒谷和紙で紙漉きに関わる職人たちが共同体の一員となる。この慣習はかつて集落の家々でおこなっていた紙漉きが「経営難」に陥った時期を乗り越えた制度が今も引き継がれたものだ。

同業者組合の成立はほかの工芸に比べて早く「紙類共同販売組合」(1892年設立)を経て、現在の「黒谷和紙協同組合(1996年設立)」へと名称・組織形態が変化してきた。

現在の黒谷和紙の重要な販売先のひとつに文化財修復分野がある。伝統的な建築の内装には障子や襖、天井など和紙が用いられていることが多く、築数百年を経た文化財建築(城、寺院、神社など)の修復時にはできるだけ建造当時と同じ製法、品質の和紙が求められる。黒谷和紙は国内でもとくに手仕事を色濃く受け継ぐ和紙産地であり、楮を自家栽培している信頼性も相まって、文化財修復分野からの発注が途絶えない。

黒谷和紙が抱える課題

現在、黒谷和紙が抱える課題は大きく分けて3点ある。

ひとつは、恒常的な原材料の確保だ。かつては他の和紙産地と同様に他府県から楮を仕入れていた。しかし、全国的な楮生産量の減少やそれに伴う価格高騰に対応するため、現在では使用する原材料の大半を黒谷地域で栽培している。紙漉き職人の減少が続くなかで、楮栽培・収穫という一年を通じた作業負担が紙漉き職人に重くのしかかっている。また、原材料にまつわる作業が増える一方で、和紙販売価格の調整をしにくい難しさもある。黒谷和紙の業用途は書画や工芸、文化財修復などの「材料」であり、作業量の増加を迅速に製品価格へと反映できないことも課題だ。

もうひとつの課題は、周辺の自然環境の保全だ。近代以前は人里離れた秘境として外界との交流が少なかったこの地域に、鉄道路線が開通し、高速道路が開通した。都市部に比べるとゆるやかではあるが宅地開発や山林開発が進む。今後、栽培のための農地確保と河川の水質保全が課題となる。また、黒谷和紙では綾部市を東西に流れる伊佐津川水系の水を利用している。近年、毎年のように発生する台風や豪雨などの災害からの復旧の遅れが、紙漉き作業の停滞に繋がっている。

最後の課題は、伝統技術の継承である。黒谷和紙は今もほぼすべての作業を手仕事でおこなうため、技術、知識ともにきめ細やかな伝承が必要だ。近代になって研究者や行政による調査が実施されて技術に関する資料が作成されたが、長く黒谷地域の住民のみで口頭伝承されてきた技術や知識も多い。現在、黒谷和紙の紙漉きに従事する職人は全国各地から移住してきた人々が大半を占める。11名のうち、黒谷地域出身者はわずか1名であり、親から子へと受け継がれてきた伝統技術と文化は、おもに他地域出身者によって継承されている。

越前和紙

日本の北陸地方に位置する福井県越前市で生産される「越前和紙」の歴史は古い。伝説によるとその発祥は約1500年前に遡る。

伝説には第26代継体天皇の在位中(507—531)、継体天皇に縁のある「川上御前」という姫によって



「越前五箇郷(不老、大滝、岩本、新在家、定友)」に製紙法が伝えられたとされている。川上御前はこの地を流れる「岡太川」の流れを指して「清らかな水に恵まれているから紙漉きをして生計を立てよ」と、地域の人々に紙漉きの技術を教えたという。

この伝説は、『日本書紀』(720年)に記されている610年に高句麗の僧、曇徴によって製紙法が伝えられた記述よりも100年近く遡る。曇徴によって日本に製紙法が伝えられる以前から、越前で紙漉きがおこなわれていたかはいまだ明かではない。しかし、越前は律令制における国府が置かれていた要地だったことや、継体天皇が皇位を継ぐ前に越前で過ごしていたことや、を考えるとまったく根拠の無い伝説ともいえない。古代の越前において、史書に記されなかった製紙法の伝来があったのかもしれない。

岡太神社・大瀧神社は川上御前を紙祖神として祀っている。紙漉き職人たちの信仰は篤く、川上御前の伝説が何世代にも渡りこの地で語り継がれてきたことを実感させる。

越前和紙の活用

現存する最古の越前和紙は、正倉院に保管されている730年(天平2年)の戸籍「越前国大税帳断簡」だ。丈夫で、美しいこの雁皮紙は当時の技術の高さを今に伝える。そして、当時すでに越前の紙漉き産地が成立しており、公文書に用いられていたほどの評価を得ていたことがわかる。「奉書紙(ほうしょ)」は、越前和紙の代名詞だ。純白できめ細かな奉書紙(楮原料)は武家社会のなかで公文書に用いられたことからこの名が付いた。浮世絵(木版画)や絵画などにも用いられ、越前和紙の名を全国区にした立役者といえる。雁皮紙、楮紙ともに画家たちから多くの支持を集めた。絵画表現の多様な需要に応じるため大判紙も漉かれるようになり、1メートルを超えるような大判手漉き和紙の技術を育んだ。江戸時代にはオランダ貿易を通してヨーロッパに運ばれ、オランダの画家レンブラントが越前和紙を用いている。

一方で、越前では丈夫な厚手の紙も得意とする。江戸時代には福井藩領内でのみ使用する紙幣「藩札」が越前和紙で漉かれていた。その後、1868年(明治元年)には全国使用紙幣「太政官金札」が越前で漉かれ、1942年(昭和17年)には大蔵省印刷局抄紙部越前工場が

設置され、その3年後から日本銀行券用紙の生産がおこなわれるようになる。全国紙幣の生産は1951年(昭和26年)までの10年間だったが、技術はその後の紙幣製造に受け継がれた。公文書にはじまった越前和紙は紙幣や証券、株券といった信頼性が要求される分野を担い続けてきた。

現在では奉書紙や書画紙をはじめ、障子紙、屏風紙など幅広い用途の和紙が漉かれている。

越前和紙の現在

越前は手漉き和紙では出荷額全国一(26億円／2017年)の産地だ。古くから紙漉きがおこなわれている「越前五箇郷(不老、大滝、岩本、新在家、定友)」を中心に越前市全域および周辺地域に製紙工場が集積する。2019年時点で福井県和紙工業協同組合の加盟企業は57社。1990年代には90社だったこ



フィールドワークをもとに描かれた漫画(抜粋) | ホリグチイツ

とを考えると急速に減少している。

今回のフィールドワークでは、「長田製紙所」「やなせ和紙」「山次製紙所」での工程調査および聞き取りを実施した。また、紙祖神・川上御前を祀る「岡太神社・大瀧神社」を訪れ、紙漉き職人たちに守られてきた信仰について調査した。

.....

Anthropographiks(マンガ人類学)

フレデリック・ジュリアン氏が提唱した「Anthropographiks(マンガ人類学)」は、これまでの社会学、文化人類学におけるフィールド調査に「マンガ家の視点」を加えることで考察に奥行きをもたらした。

イラストは大胆な単純化・強調表現などによって描き手の印象がイラストにあらわれる。写真は空間に存在するすべてをうつすが、イラストは描く過程で対象の取捨選択をおこなう。「存在しているが、描かないもの」を決めることで、そのイラストで伝えるべきことが鮮明になる。当然ながら、この過程はマンガ家ひとりがおこなうものではなく、共同研究者が考えを共有しながら実施する。

今回の調査研究では、あらためて「紙漉きと自然環境の関わり」の重要性が確認された。和紙の原材料となる楮を栽培する土壌、紙漉きに用いる水の質、和紙を乾燥させる日光など、工房に周辺環境の維持こそが伝統技術の継承に急務であるとの結論に至った。このことは、都市計画や山林整備との問題とも密接に関係するため、これまで行政が中心となって実施してきた「伝統産業活性化策」とはまったく異なる視点が必要となる。

※本研究の成果となる論文は、文章とマンガの比率を同等にして、山々と職人、工房の近さを視覚的に伝える工夫をした。論文の一部とマンガはフランスでの展覧会に展示される予定のため、和紙について知識が無い人々にも理解され、課題についての議論が生まれる内容を目指した。

今後、「Anthropographiks」の手法をさらに活用、更新して伝統文化研究の可能性を拡げていきたいと考えている。



【初出】

『Techniques & Culture』発行元:フランス国立社会科学高等研究院(EHESS)に初出(フレデリック・ジュリアン氏、ホリグチイツ氏、赤尾本織音、米原有二の共著)。本テキストはその論文から抜粋、加筆・修正を加えたものです。

【参考文献】

清水由文 | 「農村における家族変動の一考察:京都府綾部市黒谷の事例」 | 『桃山学院大学社会学論集(第33巻第1号)』 | 1999
田中親美、水尾比呂志、壽岳文章 | 『日本の工芸4 紙』 | 淡交社 | 1966
壽岳文章・静子 | 『紙漉村旅日誌』 | 明治書房 | 1944

Developing Fish Skin as a Sustainable Raw Material for the Fashion Industry

ファッション業界における持続可能な原材料としての魚革の開発

【研究協力】松山染工

ファッション業界における持続可能な原材料としての魚革の開発

現在、ファッション素材として用いられる革の環境負荷の高さが世界的な課題となっています。本研究プロジェクトは、エキゾチックレザーの代替素材として北欧で獲れる魚革に着目し、[鞣し]や[染色][縫製]などの加工技術を牛革などと遜色ないレベルまで高めようというものです。ファッションの世界を切り口に、持続可能社会、環境問題等への取り組み・提言をおこなう研究のため、試作や実験においてはできうるかぎり手仕事と天然素材の使用が求められています。

京都精華大学では、ファッション領域(研究者:小北光浩)と伝統産業領域(研究者:米原有二)が中心となって研究チームを発足し、学外の伝統産業関係者の多大な協力のもと、「日本の伝統技法・天然染料を用いた魚革の染色」の実験をおこなっています。量産には不向きな草木染めや藍染めの精度をコントロールし、魚革に安定的に染色を施し、ファッション素材として用いることのできるレベルに挑戦しています。本研究プロジェクトは、世界中から9機関が参加する国際研究プロジェクトで、それぞれの機関が専門分野を活かした調査・研究を実施しています。ファッションデザイン、マテリアルサイエンス、海洋生物学、伝統産業、環境学などが複合する研究プロジェクトです。

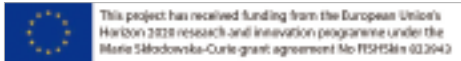
本研究は、EU最大規模の研究助成〔HORIZON 2020〕の助成対象プログラムです。



【参加機関】

シエンカー大学(イスラエル)
ロンドン芸術大学
Ars Tinctoria SRL
イスラエル国立海洋センター
アイスランド芸術アカデミー

Kornit Digital Ltd.
イタリア技術研究所
Via Talenta Group
京都精華大学



/イスラエル・エイラットでの会議に参加/

2019年2月に研究キックオフとして開催されたネットワーキングイベントに小北が参加。参加する各機関が揃い、今後の研究の方向性について議論をおこないました。



/アイスランド・ブロンデュオスで開催された会議に参加/

2019年9月に開催された会議に小北、米原、松山一成氏(松山染工)が参加しました。魚革加工をおこなう工場での見学・調査や、北欧の伝統技法を使った魚革鞣しワークショップなどを通して、魚革という素材の理解を深めました。会議では染色技法や縫製技法についての具体的な方針や、プロジェクトの運営方針、また今後、京都開催を予定しているネットワーキングイベントについて話し合いました。



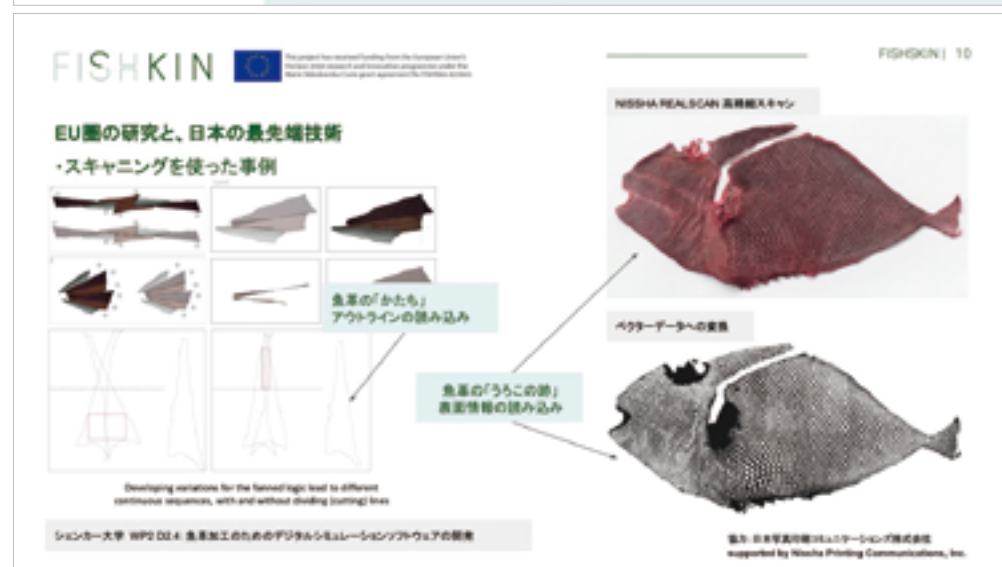
アイスランド・ブロンデュオスで開催されたネットワーキングイベント、ワークショップの様子

/日本写真印刷コミュニケーションズ「REAL SCAN」によるスキャニング/

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社の研究協力により、同社が開発した高精細スキャナ「REAL SCAN」の技術を活用して魚革のデータ化をおこなっています。魚革をファッション素材として研究を進めるにあたり、困難な課題のひとつが縫製におけるシミュレーションです。個体ごとの形状の違いや鱗の質感までもデータ上で再現する同社の技術を駆使し、現在、イスラエル・シエンカー大学が中心となって開発中の縫製シミュレーションソフトウェアの精度向上をはかっています。

/国立開発研究法人 科学技術振興機構主催学会 SCIENCE AGORA 2020での発表/

2020年11月15日-22日にわたり開催されたSCIENCE AGORA 2020のテーマは「LIFE」。11月18日に開催されたセッション「日・EUの科学者たちと「Life」について考えよう」において本センターから小北と米原、赤尾が参加し、加えて研究メンバーであるエリザ・パロミノ氏(ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 ファッションプリント学部教員)が参加。それぞれの研究領域からFISH SKIN研究についてオンライン発表しました。



高精細スキャナ「REAL SCAN」によるデータ化された魚革の染色サンプル



Humanities across Borders

越境する人文学

国際学会「Humanities across Borders (HaB)」への参加

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンターは、オランダ・ライデン大学に拠点を置くアジア研究者ネットワーク International Institute for Asian Studies (IIAS／ライデン大学国際アジア研究センター)に2018年6月から加盟しました。アジアの過去と現在を多角的な視点でとらえ、未来の社会に還元するための活動に参画します。

伝統産業イノベーションセンターはおもに分科会「Humanities across Borders (HaB／越境する人文学)」での研究・調査活動に参加します。HaBでは、参加するアジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの18校の大学院教育における共通カリキュラムの策定をめざしています。



/国立台北芸術大学での学会参加/

Indigo Traditions and Itineraries: Towards a Syllabus for Humanities across Borders

日程 2018年10月25日(木)——10月27日(土)

会場 国立台北芸術大学(TNUA)

主催 ライデン大学国際アジア研究センター (IIAS)

国立台北芸術大学文化資源学院文化資源学際研究センター

共催 国立台北芸術大学美術学院色彩文化研究室

国立台北芸術大学教学・学習支援センター

国立台北芸術大学建築・文化資産研究所

.....

2018年10月に国立台北芸術大学において3日間にわたって開催されたHaBの学会に参加。テーマは「Indigo Traditions and Itineraries: Towards a Syllabus for Humanities across Borders (インディゴの伝統とこれからの道のり——国境を越えた人文科学のためのシラバスを目指して)」。伝統産業イノベーションセンター長の米原が「日本の工芸／京都精華大学の工芸教育」についての発表をおこないました。

台湾、オランダ、フランス、アメリカ、ブルキナファソ、カンボジア、日本とそれぞれ異なる藍文化を持つ国々から参加した研究者たちの専門領域も多彩。議論は「藍染め」を軸に、伝統文化、農業、文様、民族アイデンティティ、植民地政策、工芸技法、ファッションと多岐にわたりました。

また、藍染め工房や藍栽培の農場を訪問し、現地調査をおこないました。染色の職人、研究者の指導のもと、天然染料を活用したワークショップも開催されました(資料翻訳・プレゼン通訳: 大羽勇憲)。



/The 11th International Convention of Asia Scholars (ICAS11)に参加/

会場 ライデン大学 カマリン・オンネス館B0.31

主催 ライデン大学国際アジア研究センター (IIAS)

共催 ライデン大学、フランス・アジア学ネットワーク (GIS Asie)

.....

2019年7月15日から7月19日までThe 11th International Convention of Asia Scholars (ICAS11)がオランダ・ライデンで開催されました。これは、オランダのライデン大学に拠点を置く International Institute for Asian Studies (IIAS)が主催して2年に1回開かれるアジア研究者の国際会議です。

伝統産業イノベーションセンターからは米原と赤尾が参加し、HaBのセッション「Place, Practice and Nature in Experiential Perspective 1: Indigo」で「日本の藍染め文化／染色がもたらす水質汚染」について発表しました。次回、2021年開催予定のICAS12は京都精華大学がホストとなって京都で開催される予定です(論文翻訳・プレゼン通訳: 赤尾木織音)。



School of Handcrafts

研究会「手仕事の学校」



手仕事や伝統文化に携わる人々をゲストに招いてお話を伺うトークイベント。伝統技術のことや後継者のこと、販売戦略から周辺文化のことまで。ここでしか聞けない話ばかりです。学生はもちろん一般の方も無料でご参加いただけます。



/これまでの「手仕事の学校」/

Vol.01 | 京友禅のめがね拭きがグッドデザイン賞を受賞した理由

日時 || 2018年4月12日(木) 18:15—19:20 会場 || 京都精華大学 本館5階H502

登壇者 || SOO 京友禅ブランド | 日根野孝司 株式会社日根野勝治郎商店 代表取締役社長 | 関谷幸英 株式会社関谷染色 代表取締役社長
田辺哲也 株式会社美和 代表取締役社長 | 安藤充泰 安藤染工 代表 聞き手 || 米原有二

Vol.02 | デザインの力が地場産業を変える ——体感型マーケット「RENEW」の事例から

日時 || 2018年5月16日(水) 18:15—19:20 会場 || 京都精華大学 本館5階H502

登壇者 || 新山直広 合同会社TSUGI 代表 / RENEW ディレクター 聞き手 || 米原有二

「手仕事の学校」キャリア編 | 伝統産業企業研究会 2018

開催日 || 2018年6月21日(木) 会場 || 京都精華大学 本館4階

Vol.03 | 神官装束の文様に込められた折り

日時 || 2018年6月28日(木) 18:15—19:20 会場 || 京都精華大学 本館5階H502

登壇者 || 吉田恒 有限会社吉田装束店 代表取締役 聞き手 || 米原有二

Vol.04 | 法衣からイスラム教礼拝マットへ —— これからの伝統織物

日時 || 2018年7月26日(木) 18:15—19:20 会場 || 京都精華大学 本館5階H502

登壇者 || 坂田雄介 加地金剛株式会社 聞き手 || 米原有二

「手仕事の学校」夏研修 2018 | 工芸都市・金沢を巡る

訪問工房 || [加賀友禅] 山田武士 [陶芸] 中田雄一 [和菓子] 中村辰男 なかむらや生菓子店 [日本酒] 福光屋

ナビゲーター || 中乃波木 写真家 / イラストレーター / エッセイスト / 能登町ふるさと大使

2018年の夏合宿は工芸都市・金沢。能登出身・金沢在住で金沢の手仕事に精通する中乃波木氏にご案内をお願いし、金沢の職人さんを巡りました。

Vol.05 | BEAMSが「日本の伝統」を扱う理由

日時 || 2018年11月22日(木) 18:15—19:20 会場 || 京都精華大学 本館4階

登壇者 || 鈴木修司 BEAMS JAPAN バイヤー 聞き手 || 米原有二

Vol.06 | 北海道・二風谷 ——アイヌの伝統文化と手仕事

日時 || 2018年12月21日(金) 18:15—19:20 会場 || 京都精華大学 本館5階

登壇者 || 関根真紀 アイヌ伝統文化 / 工芸作家 聞き手 || 米原有二

Vol.07 | 和紙 ——紙漉きの現場から

日時 || 2020年2月22日(土) 14:00—17:00 会場 || 京町家キャンパス ににぎ 京都市中京区三条通橋東詰町 19-1

登壇者 || 林伸次 京都府 / 黒谷和紙協同組合理事長 | 浦部喜代子 岐阜県 / みの紙工房F代表

西田勝 島根県 / 西田和紙工房八代目 | 菊地悠 島根県 / 西田和紙工房研修生 | 千田優希 京都府 / 唐長

米原有二 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター長

モデレーター || 原田紗知 紙ノ余白主宰 / 和紙研究家

現在、全国各地の気候風土に育まれてきた手漉き和紙の継承が危機にあります。紙漉き産地で技術と文化を受け継ぐ方々をお招きし、いま伝統的な紙漉きの現場で起きている道具や原材料の課題をはじめ山積する課題を率直に議論しあう機会としました。

手仕事の学校 Vol.07 | 和紙 ― 紙漉きの現場から | より採録

開催日 || 2020年2月22日(土) 14:00―17:00 会場 || 京町家キャンパス ににぎ

登壇者 || 林伸次 | 浦部喜代子 | 西田勝 | 菊地悠 | 千田優希 | 米原有二

モデレーター || 原田紗知 Photo: 本田コウイチ

伝統的な手仕事をめぐるさまざまな事柄について議論する「手仕事の学校」vol.07のテーマは和紙。いま、伝統的な紙漉きの現場で起きていること、道具や材料の課題、後継者についてなど、山積する課題を各産地から集まった担い手と話し合いました。当日は新型コロナウイルスの感染症対策として登壇者および参加者の手指消毒および体温管理を遵守徹底して臨みました。

.....

伝統文化にある固い概念を割る

米原 || 本日は歴史ある京町家を会場にお借りして「これからの和紙」について話す機会を持ちました。京都府、岐阜県、島根県の3つの産地から、紙を漉くお仕事をされている方々を招きました。それぞれの現状と課題、将来に向けた解決策などについて意見交換ができればと思っています。

ひとくちに「和紙をめぐる問題」と言っても、各産地で共通している部分もありますし、産地ごとにまったく状況が異なる場合もあります。そういった意味では、こうした機会はとても重要な意味を持つと思います。

また、今回は和紙の研究を続けておられる原田紗知さんにモデレーターをお願いして議題の整理をご一緒していただきました。大きな課題としてはやはり道具・材料の問題や、後継者問題、流通に関する問題などが軸になるかと思います。ご参加の皆さんもぜひ一緒に考え、ご意見を出し合っていただこうような機会にできればうれしいな、と思います。

原田 || 本日の進行をつとめます原田と申します。まず、本日お越しいただいている3産地の状況からお話を始めたいと思います。

お話の前に、皆さんのお手元に配布した本日のプログラムが入った封筒を手にとって見ていただけますでしょうか。この封筒には今回の3産地すべての和紙を使っています。京都府綾部市の黒谷和紙、岐阜県美濃市の美濃和紙、島根県浜田市の石州和紙をつないでいます。すべて楮を原料に使った和紙です。それぞれが特徴のある和紙ですので、この封筒を手に取りながらお話を聞いていただければ幸いです。また、和紙の文様は唐長さんにご協力を賜り板木を使わせていただきました。「氷割(こおりわ)れ」という文様です。湖面を覆っていた氷が割れる様子を文様化したもので、ちょうど今の時期のような春を先駆けるような柄です。ご登壇いただく唐長の千田優希さんからこの文様をご提案いただき、「伝統文化にある固い概念を割れたらいいな」という思いで選びました。

黒谷和紙の紙漉き

原田 || では、まずは林伸次さんから黒谷和紙についてご紹介をお願いします。

林 || 黒谷和紙は京都府北部の由良川に注ぐ2つの川を利用しています。ひとつは黒谷川、もうひとつは伊佐津川です。集落のなかにこの2つの川があります。とくに黒谷川は氾濫の多い川です。この川でおばあさんたちが楮をさらしたり、踏んだりする風景が続いてきました。集落にとっても、黒谷和紙にとっても貴重な川です。

原田 || 黒谷川の近年の水害は一昨年でしたね。

林 || そうですね。2018年の豪雨で工房が1メートルほど浸水しました。それまで井堰を利用して黒谷川の水を工房に引いていたんですが、治水の関係上でできなくなってしまいました。集落の生活や安全に関わる問題ですので、仕方がありません。今は違う治水線から水を引いています。黒谷は、組合員の共同作業場があるんです。そこに昔は、主任さんがおられて原料の工程管理などをされていました。今はおられません。この共同産業場で原料(楮)を叩いて、ピーター(攪拌機)にかけて、それぞれの紙漉き場を持って帰る。私が黒谷に来た当時まではそのような場として使っていました。今も若手を中心にみんなで使っている作業場です。



原田 || (原料を叩く機械は)「どつき四兄弟」と呼んでいますよね。

林 || 「どつき」という名前は、たぶん「胴付き」からきているんだと思います。ただ、この作業中はすごく大きな音があるので、僕らにとっては音に由来する名前にも思えて。ええ感じの名前ですね。

原田 || 補足しますと、「どつき」は楮を叩くための機械で、杵のような役割をします。楮が繊維になるための非常に重要な工程です。

林 || 紙漉きでは、塵を取る作業をけっこう時間をかけてすることがあります。和紙の種類にもよりますので一概には言えませんが。まったく取らないような和紙もあります。また、乾燥には火力乾燥機も使います。機械と言ってもかなり古い時代のものなんですか。黒谷は傘紙や渋札紙など小判の和紙ばかりを漉いてきた産地です。共同の作業場には干し板(大判の和紙を天日干しにする)で小判用しか無かったのでこの乾燥機を使い始めました。ステンレス製の乾燥機で中に水が入っていてバーナーで水を温めて乾燥するという仕組みです。黒谷では日光を利用した板干しとこの乾燥機を併用しています。

原田 || 今は季節を問わず漉いているんですね。

林 || 黒谷は昔から専門の紙漉職人が多かったので、冬だけじゃなく一年中漉いていますね。年間を通しての仕事ということであれば、現在は楮の栽培も大切です。黒谷産の楮は一時期絶滅しかかってしまい、このままではいけないということで、組合員の若手が集まって「楮の会」を結成しました。最初は楮畑保全のための活動でしたが、今は原料に地場産の楮を使うのがメインになりつつあって。ただ、現在は「一人親方」と言って、一人で全部の作業をしますので、なかなか楮栽培のすべてに関わっていくことが難しい。今後は農家さんとかと組みながらやりたいなと思っています。でも、そのためにはまずは自分たちが苦勞しないと分からないので、楮の会は続けていきます。

原田 || 楮は6月頃に出る脇芽を摘まないとそこから脇枝が出て、あとあとの処理が大変手間になるんですね。それが和紙の質にも関わります。この作業は「芽かき」といいます。夏の暑いなか、どの産地もこれが恒例の作業になりますね。

石州和紙の紙漉き

原田 || では、続いて石州和紙のお話に移ります。西田勝さん、お願いします。

西田 || はい、島根県浜田市は山口県境に近い小さい町です。三隅川という川が流れています。すぐそばが日本海なんですけど、和紙産地に海に近いところは珍しいのかもしれない。

原田 || 工房によってはときどき海水が混じることもあるそうですね。

西田 || まずは石州和紙の原料についてお話をしたいと思います。石州和紙は、だいたい12月のはじめ辺りに楮の

刈り取りを始めて、中旬から下旬までの間に皮剥きをします。

原田 紙漉きの世界では、一年でも一番忙しい冬の時期ですが、原料の準備を年末までにすべて終えるというのが石州のやり方です。なので、家族や若者たちが集まって一気に作業をするんですね。

西田 そうですね。楮は蒸したばかりのまだ熱いところを手で剥いていきます。剥きやすいようにまず端のほうを叩いて皮を剥いてから、ひとつずつ丁寧に剥いていきます。石州では、このとき足を使って先が筒状になるように剥ぎます。これを「筒剥ぎ」とか「スッポン剥ぎ」と言います。ほかの産地では、そういうやり方は好ましくないとするところもありますが、石州では、包丁で処理をする際にやりやすいということで足を使います。

原田 「筒剥ぎ」を分かりやすく言うと、靴下を洗濯機に入れるときにお母さんに怒られるような脱ぎ方です。内側が外に来るような。

西田 ひっくり返すように皮を剥ぐんです。

原田 先程、美濃和紙の浦部さんが「足を使うんだ!」って驚いていましたね。石州以外にはこの方法を使う産地ってあるのかな。足を補助的に使う産地はあると思うんですが、石州のように足をメインに使うのは本当にめずらしい。石州のおじいちゃんやおばあちゃんたち、これですいすいと剥いていっておられます。

西田 こうして剥いだ楮の皮から、さらに黒皮をそぞって(削って)、白皮にしていきます。このときの包丁の扱い方から「筒剥ぎ」が好まれているんです。石州和紙は、黒皮と白皮の間の甘皮を多めに残すことで強靱さを出しているという特徴があります。

原田 今、私が手にしているのが黒皮です。蒸して皮を剥ぐと一番外の皮はからっと乾いて風で飛んでいくんですけど、それでも残るところが黒皮です。この黒皮から黒い部分を取って、一番外側の表皮を取る作業を庖丁でおこないます。これは産地によって方法が違います。後ほどぜひ黒谷和紙や美濃和紙の方法についても伺いたいと思います。刃物の形状も異なりますよね。私は石州和紙にご縁があつて長くお世話になっているんですが、私にとって一番驚きだったのが皮剥ぎ作業をするおばちゃんたちの楽しそうな表情なんです。昨日の夕ご飯の話なんかをおしゃべりしながら手早く処理をされていて。その表情が石州和紙の印象です。

西田 そして水洗いですね。塵取りをしています。そぞり(削り)が終わった楮を釜で煮て、その後、水にさらしながらごみを手作業で取っていきます。石州という地域では、石見神楽という伝統芸能があります。そのときに使うお

面などに石州和紙を使います。たとえば、「八岐大蛇」という演目では、須佐之男命のお面、八岐大蛇の胴体、天井などに配される飾などに使います。八岐大蛇の胴体を使う和紙は「蛇胴紙」と呼んでいます。

原田 強靱さと軽さ。神楽を舞うときにかなり重量があるので、蛇胴紙でないとけない。

西田 そうですね。蛇胴紙は一般的な石州和紙ともまたちよつと違っていて。本来は剥ぐ黒皮ごと煮てしまつて、塵も入ってしまうんです。そして、かなり分厚く漉くというのが特徴ですね。

美濃の紙漉き

原田 次は美濃の紙漉きをご紹介します。浦部喜代子さんよろしく願いいたします。

浦部 はい、いまスライドに映している写真は私の先生、古田行三さんです。本美濃紙保存会の初代会長で、私は最初にこの家の紙漉きを見て本当に感激しました。漉き手の巧みさ。漉くときの水音が音楽のように聞こえました。美濃和紙の紙漉きは簀を上下左右、縦揺り、横揺りさせるのが特徴です。その動作をどれだけきれいに、一直線に水が流れないときれいな音はしない。(古田行三夫人の)古田さよ子さんも実に美しい音で漉かれる方でした。私は幸いにもここに弟子入りすることができました。(美濃市の)蔵生地域では、皆さん幼い頃からずっと紙漉きのことをやってきていました。体に紙漉きが染みついている。軽やかに何気なくやっているように見えても、実際に私がやってみると、本当に難しい作業でした。

蔵生地地区は、障子紙で栄えたところですよ。とても技術が優れていて、今でも盛んに紙が漉かれている場所です。

現在、私が使っている工房は古田さんのところの西側にある小屋です。(楮煮のための)釜場もあります。火力は

かつては薪でしたけれども、今はバーナーです。原料には那須楮を使います。美濃の蔵生地域は本当に水に恵まれたところで、紙漉きを使う水はすべて地下水です。周辺の家々もかつては井戸を掘って紙を漉いていました。

原田 浦部さんの工房の漉き舟の写真、少し注目して見てみたいとおもいます。私はとても美濃らしい漉き舟だなと思いました。

浦部 ああ、算盤が付いているところですね。紙を漉くときに一定の水量で何枚漉けるかをこれで数えるんです。たとえば洗面器1杯で50枚漉くと、和紙1枚あたりはこれぐらいの厚さ。30枚やこれぐらいの厚さという勘定で漉いています。ですので、あれ? おかしいな、30枚のはずが35枚漉けたとなると、紙が薄かったんだというふうに計算と感覚を合わせて使います。

紙の厚さをそろえるのはとても難しく、漉き始めのころは液が濃いですよ。漉くごとにどんどん液が薄くなっていくんです。その濃度を見極めながら、簀を揺する数を増やしていつ、最初から最後まで同じ厚さにしていく。とても難しい作業なんですけれども、この算盤のおかげで、今、だいたい真ん中ぐらいだな、じゃあ、揺する回数は5かける2だな、とか。そういう感じでやっています。

林 黒谷には算盤はないなあ。

浦部 紙漉きには、原料とネリと水を入れます。ネリというのはトロロアオイの根っこから抽出するもので植物です。最初は(粘力の)効きがいいんですけど、次第に弱くなっていく。ですので、粘力を加減しながら加えていきます。舟のなかの状態もどんどん変わっていきますので、勘の求められる作業です。

原田 紙干し場についても。先ほどの黒谷和紙では火力乾燥されていましたが、美濃和紙の、とくに浦部さんが漉かれている和紙は天日乾燥が特徴ですね。

浦部 この家は南向きの広い場所があります。ここは、かつて板が3段並んだ庭でしたので古田さんの工房の仕事と私たちの仕事の工房の2軒が一緒に紙を干せます。家の前を流れている長良川の支流・板取川は、紙をさらしたり、夏場には干し板を洗ったりと使います。

美濃和紙の原料には茨城県産の楮を使うことがほとんどです。しかし、一部、美濃でつくった楮を使うこともあります。今はボランティアの方の力を借りて栽培ができている感じです。月に2回ほどボランティアの方に来ていただいて、暑いなか草取りや芽かきしてもらっています。

楮栽培の現状

原田 後半は、まずは楮に焦点を当てて進めたいと思います。黒谷和紙、石州和紙、美濃和紙それぞれに楮との関わり方が違います。

石州では使用する楮をほぼ全て自分たちで育てておられます。一方で、黒谷は昔からご自身たちでも育てながら、ほかの産地のものも購入されていますね。

林 おそらく、紀州(和歌山県産の楮)を使い出したことで、その生産量の増大化が(黒谷の楮生産にも)関係していると思います。

原田 石州和紙の西田さんは、お父さんからお仕事を引き継がれている立場ですね。小さな頃から楮栽培は身近だったと思うんですけど、紙を漉く人が楮を育てる利点と苦勞、その両方からちよつとお話いただけますでしょうか。

西田 うちが自社で栽培するようになったのは、けっこう最近になってからです。ずっと同じ地域の方に楮を育てていただいて、それを購入するというかたちで地元の原料をずっと使ってきました。

自分たちで育てる利点は、和紙原料としての問題を自分たちがよくわかっている点ですね。先程の芽かきの重要性だとか、蒸しの問題とか、そういうところに楮の性質がどう関わっているかを。あとは、収穫時もそうですね。鎌やはさみを使うんですけど、そのときに刃先を斜めにして次の収穫をしやすいうようにするとか、楮の長さを釜に入れやすいようにするとか。そういった細かいところは、自分たちでやっている次の年に改善点をすぐに反映できます。

原田 ひとつひとつの作業にどういう意味があるかが分かるということですね。

西田 でも、その分だけ時間を割かれるので、全部の原料を自分たちでというのはどうしても限界がある。やはり身近





にいる農家さんに楮栽培をやっていただくのが理想ではあるんです。けど、(紙漉きから)あまりに離れすぎていると、さっき言ったような問題があるので、自分たちに近いところにいる農家さんから原料を安定的に確保するのが理想なのかなと思います。

原田 林さん、黒谷の状況も教えて下さい。

林 黒谷での楮栽培は近年です。昔は、自分たちの山で育てていて、周辺の農家さんが担ってくれていました。近年は、紀州(和歌山県)や土佐(高知県)から楮が入るようになり、(黒谷の)地場産と関西圏、あとは特殊な紙だけ那須楮のようなかたちで使い分けていました。かつては、地場産が6割以上占めていましたが、それは地域の農家さんがつくってくれていたんです。

ただ、やはり高齢化で、その農家がどんどん減っていくと。(黒谷和紙協同組合での)保全という話になりました。(紙漉きの)若手に(地場産の楮を)残していかなければいけないということになりまして、今は地場産の楮がメインになりつつあります。そうなると、やっぱり手が(栽培に)取られるので、今度はまた農家さんをお願いしていかなきゃいけないという問題に直面しています。そのためにはシステムが必要。先程、西田さんが言っておられた紙漉きの特徴を説明して、生産してもらう仕組みがないと広がっていかない。もちろん生産された楮の買い取りや、価格の問題もあります。結局、自分たちの目の届く範囲で確保できることが一番安心感がある。

原田 浦部さん、那須楮は今、産地の状況はどのようになっていますか。

浦部 紙を漉く人がだんだん減ってしまっ、楮栽培のほうも縮小しているような感じです。また、楮を栽培してくださる方の高齢化もとても問題になっています。今、私が購入している農家さんは、70代のご夫婦です。

どうして茨城県的那須楮を岐阜の人が使うのかと言いますと、那須楮の特徴が関係しています。那須楮は繊維が短くてとてもつやのある和紙に仕上がるんです。那須楮は白皮にする技術がとても優れていて、本当にプロフェッショナルな方がこの作業を徹底していて、素晴らしい技術をお持ちなんです。

かつては美濃でも津保草という良い原料が採れたんですけども、今はもうありません。そこで良い楮ができる茨城県に頼るようになったということです。

那須楮は傾斜地で育てます。足場の悪いなかを高齢の方が作業する。楮ってむちゃくちゃ重いですよ。長さが2〜3メートルあるんです。そういう枝を何10キロという束にして担いで坂を下りていくんですね。お手伝いをしたことがあるんですけども本当に大変な作業です。

楮の刈り取り後も、黒皮を1本ずつ白皮にする作業があるんです。手作業で包丁を使って1本1本、本当に大変です。でも、今はその作業をしてくれる方がいないと言って嘆いておられました。楮を蒸すことができて、削るのに時間

がかかって腐ってしまうんじゃないか、カビが生えてしまうんじゃないかと、この前おっしゃっておられました。そんな問題があります。

原田 これは、ほかの産地にも通ずるかと思います。高齢化の要因のひとつには若い世代の生活を支えられないことも挙げられますね。林さん、この点いかがですか？

林 そうですね。楮はあまり知られていない植物ですし、価格だけを見ると安くはないんですけど、(生産者の)労力からするとまったく見合わない。たとえば、お米でしたら、生産過程や運搬など機械が使える作業も多いので今も高齢者の方が多いんですけど。楮はほとんど手作業なので、割に合わないですね。

西田 今、石州は、僕も含めてわりと若い人がいる状態なので研修会という名目で共同で畑を借りて一緒に楮栽培の作業をしています。そこでは僕の親世代の方たちに話を聞きながら直接教えてもらっています。その点では技術継承の役割も担っているのかなと思っています。

原田 若い方のお話も聞いてみたいです。本日、石州和紙からお越しいただいている菊地悠さんをご紹介しますね。菊地さんは、黒谷和紙の林さんが教鞭をとってらっしゃる大学の和紙工芸専攻の卒業生です。卒業後すぐに石州和紙紙漉き研修生になられて、今、石州で3年学ばれたところです。黒谷と石州、2つの産地をまたいで紙漉きに携わられているという、ちょっと希有な経験をしている方です。菊地さん、楮栽培は石州で初めて体験されたんですか。

菊池 黒谷では大学の授業でほんの少ししたぐらいです。本格的に畑に入ったのは石州で初めてですね。

原田 自分で育てた楮を自分で漉くという工程はいかがですか。

菊池 やっぱり(楮栽培の)大変さをすごく感じるので、あまり無駄にできないな、という気持ちが生れます。また、和紙を原料から遡って考えることもできるようになったとおもいます。

和紙の価値

原田 米原さんは漆などの取材調査もされていますが、ほかの工芸分野では原材料の安定化はどのように取り組まれていますか。

米原 制作者が材料もつくるといのは、一見、理想のようにも思えますけど、本末転倒であることが多いのではないかなと思います。農作物に限らず、材料も道具もみんなスペシャリストがちゃんと自分の領域を突き詰めてしっかりやる分業制が全体の精度を高めてきたのだと思います。だから、本当は分業は維持されるべきだと思うんですけど、今とこれからの社会の状況にも大きく左右されますよね。紙漉きの原料は農業の問題、水の問題と密接に関わっていて、大きな視点で考えると農業政策とか都市計画の問題でもあります。紙漉き業界の人だけでは解決しきれないと思います。

原田 紙漉きの当事者が、原材料生産まで担ってしまうと、紙を漉く時間と手間を割くことになる。でも、農家が栽培に費用がかかってその対価を得られないという問題も残ります。

米原 漆でも、漆掻き(ウルシの木から樹液を採取する仕事)をする人が少ないという課題があります。全国の漆産地で漆掻き職人になる若い人を増やすための取り組みがおこなわれていますが、課題になるのは楮やトロロアオイと同様に「割に合わない」という部分です。もともと漆掻きは農閑期の職業として続いてきた部分もあるので、漆掻きの収入では年間暮らせないですよ。でも、現代の若い人が職業として熟練になるためには、一年の大半の時間を費やす必要もあつて。そこで得られる対価と手間のバランスがとれないまま、突破口が見つからない状況です。織物における養蚕・製糸などもそうですね。いま、手仕事はどこでもそういうことが起きているなというのをあらためて感じます。手っ取り早い解決策ってなかなかないです。突き詰めると、道具・材料の単価を上げるしかないのかな、と思います。緑の下の方の力持ちの仕事に対して金銭的評価が低いことで成立してきた構造を変える。これにちゃんと向き合わないといけない。廃業する職人さんや農家さんの話を聞くにつけ、そう感じます。

昔は、道具や材料をつくる人の総数が多かったので、10人辞めたところでまだまだ何百人も何千人もいて危機感はない。でも今は「最後の1人」「最後の1軒」ばかりになって、目に見えて消滅を実感するようになった。和紙におけるトロロアオイ栽培に対する対価や、楮の皮剥ぎの対価というのをちゃんと考えなくちゃいけない。また紙を漉く人は自分が漉いた紙の労働対価と原料費をあらためて考える。そして、紙を買う人は、和紙を取り巻く状況を理解して適正価格を考える。こうして、みんなでもう一度考える必要があるんじゃないかなと考えます。自省も込めて、そう思います。

原田 〓 唐長の千田優希さんは、こうした話題を日頃からよくお考えだと思うのですがいかがでしょうか。

千田 〓 私は、和紙を使わせていただく仕事をさせてもらっていますが、和紙も唐紙もつくれる限界ってあるじゃないですか。たとえば、24時間寝ずに唐紙をつくり続けても、大手製紙会社の100万分の1の量もできない。今、私のお客さんってどれくらいいるんだろうと考えたとき、100人もいらっしゃるんやろか?と思います。すると、その100人の方がどんな唐紙の使い方をされるかを考えて仕事をしようと思うんです。京町家の空間の襖に使うのか。マンション壁紙に使うのか。また、作り手である私はどう使ってほしいと考えるのか。手仕事はつくれる量が限られて



いるからこそ、こう考えるべきかなと思うんです。

先程、米原さんがおっしゃったように、商品の単価を上げていかないといけない現状があるんだつたら、「単価が上がってもいいよ」と言われるような空間にダイレクトに届けるような感覚や工夫というのが必要かなと思うんですね。

すべての労力を単価計算してしまうと、たぶん今、皆さんが販売されている和紙の価格は完全にオーバーしちゃう。でも、今はボランティアの方や高齢のおばあちゃんたちとかに支えられているからそれで成り立っているけどそれがいつまで続くのか。そこに頼り切った現状というのは整理しておかないとあかんのかなと思います。

整理すれば単価が上がる、単価が上がるということは「上がってもいいよ、美しいからね」と言われるようなところに使ってもらえるようにしないと。

林 〓 価格を上げざるをえないというのが、たぶん答えなんでしょうね。大手製紙会社の機械で和紙と呼ばれる紙がつくれる時代です。黒谷和紙は女性や高齢者の労働力があって発展してきました。本来、この人件費は製品価格に反映しなくてはならない。黒谷和紙は問屋さんに商売を頼る部分が多いので、これまでは思いきって価格を上げられなかった。でも、もう今後の選択肢はあまりない。「安価な原料で大量につくるか」「これまでのつくり方で価格(上昇)を理解してくれるところに販売するか」の二択で、黒谷和紙は後者だと考えています。

ふと「あと50年もしたら、畑にも、紙漉き場にも人はいないかもしれない」なんて思ったりもします。黒谷和紙は、過去に一度後継者が途絶えてしまった産地です。そして、私を含め他所からやってきた人たちが「紙漉きが好きだから」と引き継いできた。ですので、これまでは報酬についてあまり深く話し合っていませんでした。でも、今後「産業」として若い世代が仕事と考えるなかでは報酬の見直しは必須。うちは報酬について組合主導でおこなっていますので、皆で模索していかなければなりません。

原田 〓 黒谷和紙協同組合の役割を少しご説明いただけますか。

林 〓 大雑把に説明すると組合は産地問屋さんみたいな存在です。古くは村の皆が農業のかたわら漉いていた紙を、誰かが集約して問屋さんに売っていた。その名残ですね。黒谷和紙の価格は基本的に組合が決めています。値崩れはしない分、値上げは大変。制度的に変えづらいことが多いですが、変わらなきゃいけない。基本的に生産販売組合です。

原田 〓 組合員さんは、自分が漉いた和紙がどう使われるかはご存じなんですか。

林 〓 僕が入ってきたころは、ほとんど分からなかったですね。京都(市内)や東京の問屋さんに卸していたので、組合員どころか組合もたぶん分かっていなかったと思います。今はね、だいぶん分かるようになってきました。

原田 〓 黒谷の和紙の生産のしかたというのは、主に受注生産というつくり方。注文を受けてその用途に合わせてつくる。その用途の先、流通の先を知らないまま紙を漉くって大変なんじゃないのかなというふうに思うんですけど、いかがですか。

林 〓 そう、むちゃくちゃ大変でした。昔は組合が指示を出して組合員がどんどん漉くという感じでした。でも、売り先も減ってきて組合が縮小していく過程で受注生産に変わってきた。ただ、そうなってくると紙漉き屋(紙漉き職人)さんそのものが苦しくなる。注文が来るまで漉けないから。ほかの産地やったら漉いた紙を自分で担いで売りに行けばいいですが、黒谷の場合だと(組合で問屋と付きあうので)個人では売りようがない。それではいけない、というので、組合で定番品をつくってその分はロットで買い上げましようとしたんです。組合で在庫を持ちましよう。在庫がいっぱいになるまでは頑張って紙を漉いてくださいよ、という方法を取ろうとしています。

原田 〓 千田さん、唐長では黒谷和紙もよく使われると思うんですけども、「和紙の用途」という話でいくとお考えの点

はなにかありますか。

千田 〓 そうですね。林さんと仲良くなったのってここ数年なんですけど、長年ずっと唐長に紙を漉いていただいでいて。主に文化財建造物に使う唐紙として使います。先ほどからずっと出ているお値段の話も、去年でしたか、林さんから「値上げさせてください」と頭を下げられました。私は「いや、頭を下げないでください、上げんと駄目でしょう」という話をしました。普通の商売で値上げと言ったら、「じゃあ、他所(の産地)を探すわ」ということになっちゃうと思うんですけど、唐紙における黒谷和紙は違う。紙を漉く人、原料を栽培する人、私のように紙を使う人が一体になって「紙の価値」というものを保つていかんとあかんのかな、と思っています。ですので、価格が安いに越したことはないですけど、楮の畑で頑張る若い人や紙漉きの若い人が夢を持って仕事をできる時代にするために。黒谷の紙漉き職人さんにはまだ20代の方もいらっしゃいますね。私にできるのは、黒谷和紙を美しく使い、それを見せていくこと。ですので、時代に応じて価格が上がっていくのは当然のことやと思っています。

紙漉きの方たちも「自分たちの漉いている和紙の価値って、こんなにすごいんや」って胸を張ってもらいたい。そして、それが広く消費者まで届くようになってほしい。正直なところ、私一人が値上げを了承しても限界があります。本日は3つの産地の方にお越しいただきましたけど、和紙はまだ北海道から沖縄まで産地があります。和紙業界全体と私たち使う者、そして広く社会の皆さんで和紙の美しさというものをもつとつと知ることが大切かなと思うんですね。美しさとか、価値のバトンリレーをしつかりと目指していきたい。それが私たちが関わる伝統を繋いでいくことになると思います。

原田 〓 浦部さんにもお話を伺います。そもそも和紙の出会いは関西だったんですね。

浦部 〓 私は京都精華大学のデザイン科の卒業生です。大学3年生のときに、京唐紙の唐長さんのところに学外実習で伺いました。そこで、京唐紙の素晴らしさ、その色合い、そして柄のデザインに出会いました。そこに、その土台となっていた和紙の美しさ、温かさ、質感に本当に惚れ込んで「これは私の一生の仕事だ」と思って、今、紙漉きをしています。

米原 〓 今も「京都の伝統産業演習」という名前で続いている科目です。唐長さんにも毎年学生がお世話になっています。

原田 〓 浦部さんの世代では、おそらく県外からその産地に移住して紙漉きをするという事例がまだあまりなかったのではと思います。

浦部 〓 私が縁あって岐阜県美濃市に行った20代後半の頃には、同世代の方は紙漉き産地にはいらっしゃらなくて。私の親世代もずぼっと抜けているような状態。一緒に仕事をしていたのは、おじいさん、おばあさんの世代の方ですね。私の親世代は、紙漉きはとても生活ができないから、ほかの仕事をしていることがほとんどでした。繊維関係や美濃市の隣の関市の刃物関係など。和紙は斜陽産業という印象でしたね。住宅から和室がなくなり、障子そのものがない。そうして和紙の需要が急速に減っていた時代でした。美濃の方には「大学を出て、どうしてこんなところへ。物好きだね」って言われていましたけど、和紙の素晴らしさ、紙漉きの動作の美しさに惚れていたからどうしようもありません。

米原 〓 話が尽きませんね。今日は「材料」「流通」「人材」に関することの3つの話題がありました。和紙に関わらず、伝統や工芸、文化といったことが語られるときには、必ずこの3つが挙がります。もう何十年前からそうなんですよ。やっぱりこのシンプルな3つの問題が、いかに答えが出ないかということをあらわしていると思います。紙漉きは人力なので、人の働き方の問題であるとか、もう少し言えば働く人の心の問題に負うところもすごく多いというのが、あらためて今日の実感でした。やっぱり産地の数だけ状況があって、事情が違うわけですから。やっぱりこうして話しあう機会がないと、産地ごとにどう違うのかも分からないし解決の糸口すら見えない。そういう意味で、今日はとてもいい機会だったんじゃないかなと思います。

今日、ご参加いただいた皆さんとは、これから紙漉きのあり方を一緒に考える仲間になりたいな、と思います。ともに自分の問題として。ありがとうございました。



Craft and Culture Database

工芸文化データベースの公開

2020年に「京都精華大学 工芸文化データベース」を公開しました。京都の主要な伝統産業についての情報や、工芸を支える道具・材料に関する資料を掲載しています。また、「石黒宗麿の陶片群」に関する資料など本学の伝統文化に関する研究成果も集約し、今後も研究活動の活性化とともに成長するデータベースとなる予定です。掲載情報については、日本語・英語で記載しています（翻訳：赤尾木織音、神沢希洋、森本優芽）。

/掲載情報(抜粋)/

京都市指定工芸品 74 品目

京都市が指定する74の伝統的工芸品についての画像資料および解説を掲載しています。今後は全国各地の国指定工芸品の網羅を視野に入れ資料の充実をはかります。

.....

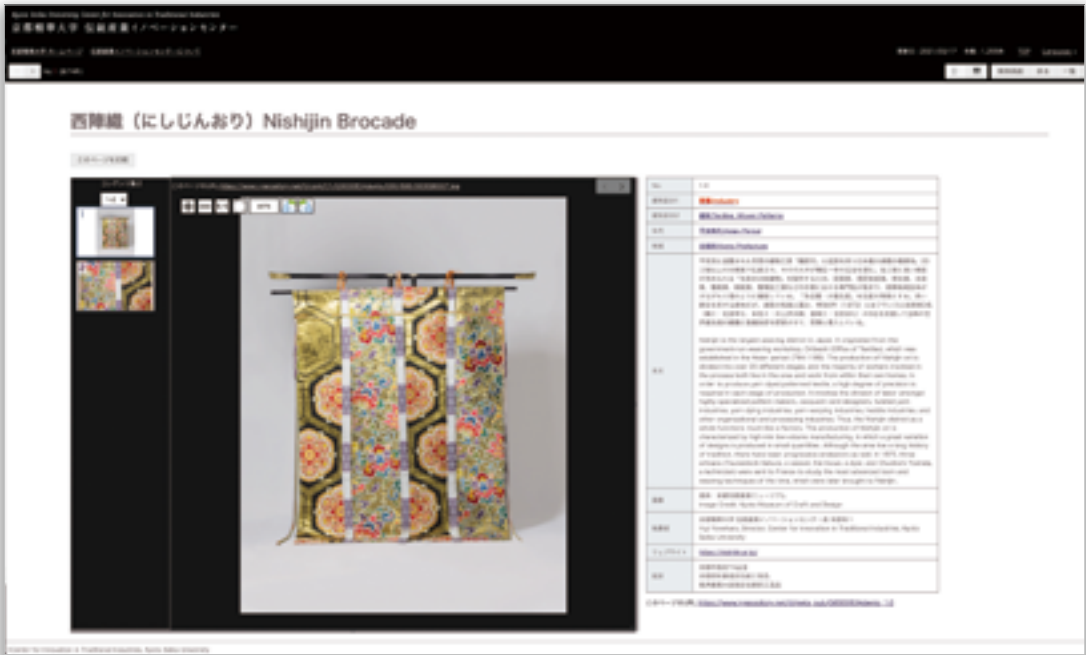
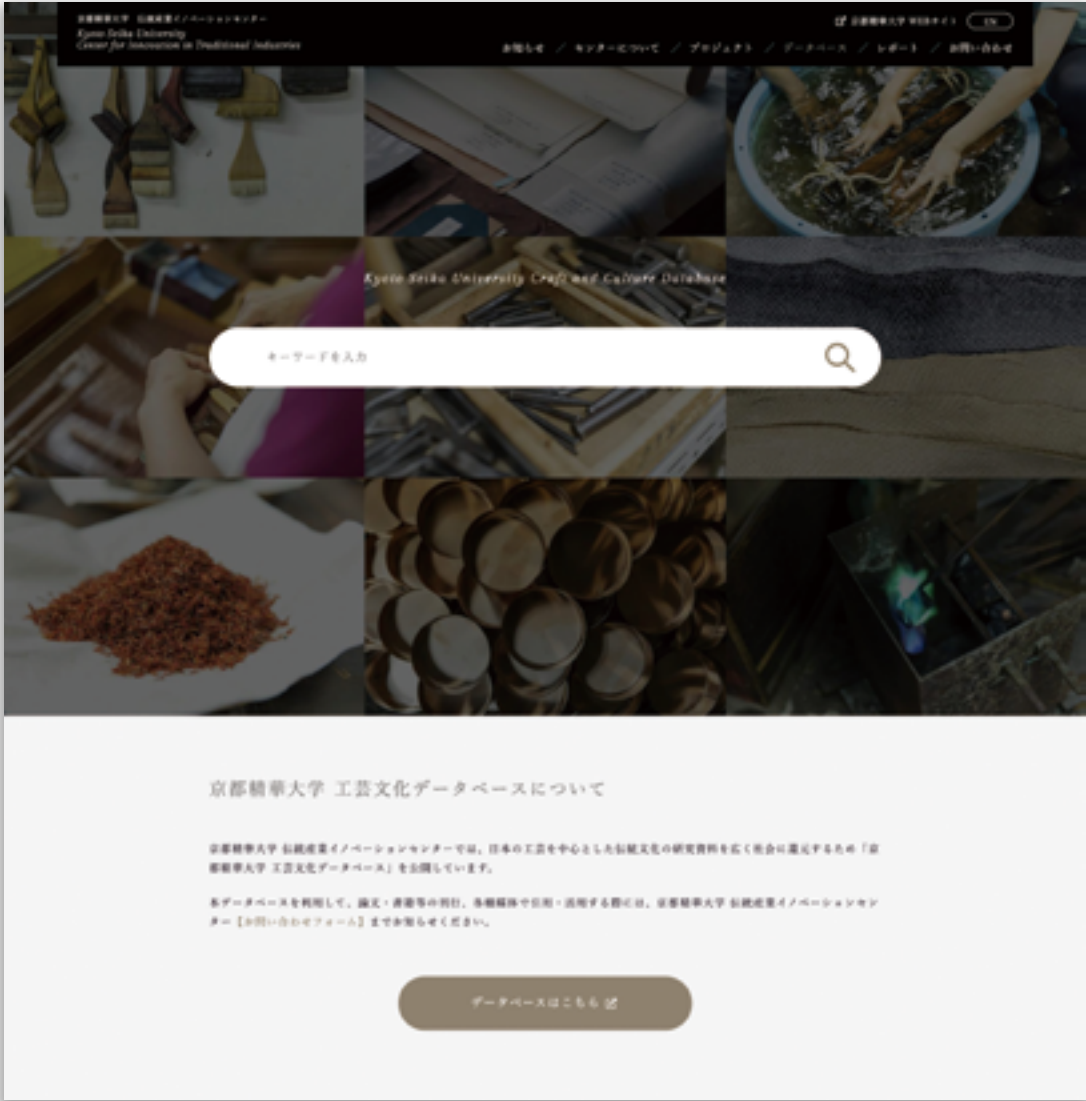
工芸技術および道具・材料

染織や漆工、金工、木工、陶芸など工芸技術や意匠に関する資料に加え、入手が困難な道具や材料についての資料を掲載。これまで伝統産業イノベーションセンターが取り組んできた研究成果を公開し、今後のさらなる教育・研究活動の礎となる内容をめざしています。

.....

石黒宗麿の陶片群

近代陶芸を代表する陶芸家、石黒宗麿(1893—1968)が晩年を過ごした工房兼住居「八瀬陶窯」から発掘された約2,000点の陶片を釉薬・技法ごとに24分類しています。また、2018年度の八瀬陶窯調査研究で登り窯(二の間)から発見された石黒作と考えられる「木葉天目茶碗」に関する資料も掲載しています。



Research on the Usage of Lacquer

漆の活用法に関する調査研究

【研究パートナー】株式会社 堤浅吉漆店 | 一般社団法人パースペクティブ

漆の強い塗膜と高い抗菌性を併せ持つ天然塗料としての特徴に着目し、さらなる用途拡大のための研究活動をおこなっています。
漆塗膜が紫外線によって劣化するという弱点を漆精製工程から考察するため堤浅吉漆店に研究協力をしていただいています。
また、持続的な漆の採取について森林・自然環境、漆掻き業、漆精製過程を複合的に考える調査研究を実施しています。

/漆研究プロジェクト(抜粋)/

コラボレーション演習「おもいで織リプロジェクト」での漆活用

「西陣織の新たなサービス開発」をテーマに和工房 明月とのコラボレーションをおこなう講義において、西陣織を補強するための芯材に漆塗を施しました。学生たちが自身で選んだ多様な素材に漆塗りをおこない試作品を制作しました。木材だけではなく樹脂や金属、和紙、布などさまざまな素材に漆を塗り、「水と空気以外は塗れる」といわれる漆の用途の広さを実感する機会となりました。

.....

デザイン学部建築学科での漆活用

建築学科では2018年の台風21号で甚大な被害を受けて倒木した鞍馬寺境内のヒノキやスギを活用した制作活動を続けています。その一環として、伝統産業イノベーションセンター協力のもとで学生が制作した木工品に漆塗を施しました。学生からは色漆の表現力の高さや、漆塗膜の強靱さに驚く声があがりました。

.....

漆と木のストロー「/ suw」

堤浅吉漆店と吉田木工、辻井木材による、漆と木で持続可能なものづくりを実現するためのプロダクト開発プロジェクト「U, W Product」の第一弾として生まれた「漆と木のストロー『/ suw』」の開発に協力しています。このストローは、環境問題と森林保護の視点から「大切に使い続けることができる」ことをテーマにしています。従来の木製ストローは耐久性に難があり使い捨てられることが多く、その弱点を漆塗膜の耐久性で補っています。使用する木材は京都市右京区京北町産のものが中心。工芸から持続可能社会へのアプローチをおこなっています。



動画「/ suw 漆と木のストロー」より 映像：亀村佳宏

/アジア太平洋無形文化遺産国際情報ネットワークセンター主催の無形文化遺産保護研究会で研究発表/

Diversity and Distinctiveness: Looking into Shared ICH in the Asia-Pacific Asia's Shared Heritage across Borders —— Lacquer | 多様性と特殊性: アジア太平洋地域の共通無形文化遺産について —— 漆

日程 || 2021年2月18日(木)

開催方法 || オンライン (YouTube ライブ配信) 言語 || 韓国語・英語

主催 || 韓国伝統文化大学校 (NUCH) / 無形文化遺産保護研究会 [APHEN-ICH] 事務局

共催 || アジア太平洋無形文化遺産国際情報ネットワークセンター (ICHCAP)、UNESCO バンコク事務所

.....

米原有二(伝統産業イノベーションセンター長)が「日本の漆工芸」というテーマで発表をおこないました(論文翻訳: 赤尾木織音)。

教育活動

Education

工芸や伝統産業の未来について思考することは、培われてきた職人の技術を学び、伝統産業の現場を知るための「教育活動」と分かちがたく結びついています。伝統産業イノベーションセンターは、京都精華大学の伝統産業実習を監修し、手仕事の記録をアーカイブ化することで、伝統から学び、今を生きる学生たちが自らの身体によって伝統を捉えなおす方法を作り出しました。次世代の新たな工芸の未来へ向けて、教育と継承の場を大学のなかに作り出していくことは、伝統産業イノベーションセンターの重要な活動のひとつになっています。

京都の伝統産業演習

伝統を体感し、匠の技に学ぶ。京都精華大学だけの特別プログラム。

染織物、陶磁器、漆工芸、香など日本の伝統工芸・文化がいまに生きる京都。芸術学部・デザイン学部・人文学部・マンガ学部・ポピュラーカルチャー学部では、3年次以降の夏季休暇の2週間を利用して、伝統工芸を中心とした産業の現場を体験的に学習する「京都の伝統産業演習」を実施しています。参加できるのは指定された講義科目「京都の伝統工芸講座」を履修した3年生と4年生。学部やコースを超えて選択できる多彩な実習先があり、京都で芸術を学ぶことの意義を肌で実感できる、貴重な場。毎年多くの学生が生きた伝統にふれ、制作に新たな視点や可能性を見出しています。

伝統産業イノベーションセンターでは、共通教育科目、副専攻科目として開講される本講義の監修協力をおこなっています。

※2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により中止。



「京都の伝統産業演習ノート」を刷新

京都精華大学が40年以上にわたって実施している伝統産業演習は、学生が職人さんの工房に通い、親方と同じリズムで作業をおこないます。近年は全学部・全専攻領域の学生が参加可能となり、さまざまな「表現」に大きな影響を与える学びの機会となっています。学生は学んだ内容を「伝統産業演習ノート」に記録します。これは、学生と教員、お世話になる工房の職人さんを繋ぐ大切なものです。

2019年に「伝統産業演習ノート」を全面的に刷新しました。記入項目を整理し、より学びの内容がわかりやすく記録できるようにしました。その日に学んだこと、わからなかったこと、大学で学ぶ専門領域に活かしたいこと、工房で見つけた気付きなど。学生たちは文章だけではなく、イラストや写真、ときには現物（織物の切れ端など）をこのノートに貼って、貴重な体験の記憶を心に留めようとします。毎年開催している「京都の伝統産業演習報告展」では、学生たちが制作した作品とともにこのノートも展示しています。



デザイン: EIGHTYONE Inc.

過去40年間の「京都の伝統産業演習ノート」のデジタルアーカイブ

1979年に開講した「京都の伝統産業演習(旧名称:学外実習)」で学生たちが使用した「京都の伝統産業演習ノート」約1,800名分をデジタル化しました。これまでの教育成果をあらためて振り返る記録として教職員が活用します。

『京都の伝統産業演習てびき』制作

学生が大学から離れて実施する「京都の伝統産業演習」に安心して参加できるよう、2019年に『京都の伝統産業演習てびき』を作成しました。演習中に想定される事故や突発的な出来事への対処についてイラストとともに説明しています。イラストは在学生が担当しました。また、留学生も安心して参加できるよう日本語は日本語能力試験N2を基準とし、一部英語での説明も併記しています。



デザイン: EIGHTYONE Inc.
イラスト: ヒグチ キョウカ
翻訳: 赤尾木織音

「京都の伝統産業演習」演習風景を記録撮影

2019年度の「京都の伝統産業演習」の様子を記録撮影しました。次年度以降に演習に参加する学生たちの事前学習に活用します。

撮影 中島光行



京都の伝統工芸講座

京都の伝統美を受け継ぐ、豪華な講師陣

「京都の伝統工芸講座」では、京都の伝統美術・工芸に関する研究者や作家、職人、デザイナーなど毎回異なる分野の講師が各々の専門テーマで講演をおこないます。この授業は公開講座として広く市民の方々や他大学の学生方にも開かれた講座です。

伝統産業イノベーションセンターでは、共通教育科目、副専攻科目として開講される本講義の監修協力をおこなっています。

※2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン講義として開講し、公開講座としては実施せず。



教育後援会 懇親事業

京都精華大学と学生保護者を結ぶ教育後援会では、年に一度、会員間の親睦を深めるために懇親新事業を開催しています。

.....

日本の文化と暮らしを灯す 和ろうそくの世界

｜ 日程 2018年11月3日(土) 講師 大西巧 近江手造り和ろうそく大興四代目 聞き手 米原有二 伝統産業イノベーションセンター長

.....

日本人の知恵と心と美意識が育てた「ふろしき文化」

｜ 日程 2019年11月2日(土) 講師 山田悦子 山田繊維株式会社 聞き手 米原有二 伝統産業イノベーションセンター長

国立台北芸術大学 国際シンポジウムで研究発表

国際講座シリーズ

「Ecology, History and Cultural Heritage (生態系・文化遺産・知識生産)」

日程 2020年11月19日(木)
会場 国立台北芸術大学 言語 中国語
主催 国立台北芸術大学 文化資産・芸術創新博士課程
共催 オランダ・ライデン大学国際アジア研究センター (IIAS)
協力 国立台北芸術大学 伝統芸術研究センター
国立政治大学台湾史研究所 (NCCU)

.....

米原有二 (伝統産業イノベーションセンター長) が「京都の染色と水質について」というテーマで発表をおこないました。



社会との関わり

Outreach

伝統産業イノベーションセンターは、研究活動や学生への教育活動にとどまらず、社会との関わりのなかで多くの活動をおこなってきました。公開講座や展覧会の監修などを通して、手仕事や伝統産業の新たな可能性や重要性を、大学やセンターの外部と協働で思考することは、センターにとって「研究」や「教育」とならぶ重要な活動の一環になっています。こうした関わりを通して、センター自体が社会のなかで伝統や工芸を活性化させるものとして機能していくことを、私たちは期待しています。

公開講座「ガーデン(生涯学習プログラム)」への講座提供

公開講座ガーデンは、京都精華大学の〈知〉や〈技〉をさまざまな形で提供する生涯学習プログラムです。伝統産業イノベーションセンターでは、手仕事や伝統文化に関する講座を提供しています。



2018 | 2019

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター監修 京都の伝統産業講座

【金継ぎ】愛用のうつわを永く使うために

講師 堀卓也 堀浅吉漆店

京都漆器組合青年会

会場 京都精華大学



2018 | 2019

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター監修 京都の伝統産業講座

【京焼・清水焼】伝統技法「いっちゃん」で、小皿に文様を描こう

講師 高島慎一 洗春窯

会場 洗春窯



2018

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター監修 京都の伝統産業講座

【京友禅】型染めで伝統模様挑戦

講師 池田泰久 池田染工株式会社

会場 池田染工株式会社

三木特産工業技術研究会 講演会

これからの伝統産業 ―― 京都の事例から

日時 2019年9月27日(金) 会場 三木ホースランドパーク エオの森研修センター 講演 米原有二 伝統産業イノベーションセンター長

京都職人工房 ライティング講座

日時 2019年9月28日(土)・2020年10月3日(土)

会場 京都リサーチパーク

講師 米原有二 伝統産業イノベーションセンター長



伝統産業イノベーションセンター特別ゼミ「工藝部」

京都精華大学がある京都市は74種類の伝統産業が集積し、約2万人の職人さんたちがその技を受け継ぐ、世界有数の「工芸の街」です。ここでは、伝統は遠く仰ぎ見るものではなく、日々の暮らしのすぐそばにあります。社寺の屋根瓦のかたち、鳥居に塗られた鮮烈な朱色、着物を彩る伝統文様……。この豊かな「伝統文化」「職人技」に学びたい、そう考える学生が集まって伝統産業イノベーションセンター特別ゼミ「工藝部」ができました。京都の街を教室に、伝統工芸の職人さんたちを先生にして工芸の技術や意匠、その精神性までも学んでいます。



手仕事の循環をつくるプロジェクト

「材料の枯渇」と「工房廃棄品」ふたつの問題と向きあうために

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター特別ゼミ「工藝部」では、学外の職人さんの工房を訪ねて、手仕事の「歴史」と「今」と「未来」を考えよう、という活動を軸にしています。そうした工房訪問を重ねるなかで、浮かび上がってきた「今」と「未来」の課題が、道具や材料の枯渇問題でした。伝統的な手仕事を支える道具や材料もまた、専門の職人さんの手仕事によってつくられています。上質な木材は、植樹をして、数十年ものあいだ山全体のお世話をする職人さんがいるからこそ。竹も絹糸も漆も、みなそうして生産され、工芸品をつくる職人さんの手に渡って、「伝統工芸品」となって世に出ていきます。その循環が、今、失われつつあります。環境問題や雇用問題など、社会情勢

の影響も大きく受けながら。わたしたちは、この問題に向きあうため、2017年から行動をはじめました。手仕事の世界は数十年、数百年といった時間軸で物事が動きます。しかし、道具・材料の問題に関しては、今まさに、事業者さんの廃業や産地の消滅が続いています。私たちが目指すのは、道具・材料の職人さんたちに対する直接的な支援です。

着目したのは、工芸の工房で出る「廃棄品」でした。たとえば、木工職人さんの工房では、毎日大量の鉋くずが生まれます。かつては銭湯の方が着火用に引き取りに来ていたそうですが、今は「産業廃棄物」として有償で業者さんに引き取ってもらっているのが現状です。木工職人さんが仕事を頑張るほどに、鉋くずの処分コストがかさんでしまう構造があります。

一方で、工芸で用いられる木材には上質なものが多く、工夫次第では鉋くずであっても商品価値を持つ可能性があります。神社関係の木工品では定番のヒノキは香りが良く、鉋くずをメッシュに詰めるだけでも簡易の「ヒノキ風呂 入浴剤」になります。また、そもそも、熟練の技で薄く、真っ直ぐに挽かれた鉋くずはそれだけでも価値を持つはずです。

捨てるはずだったものが、知恵と工夫で売れるかも知れない。その売り上げを、今、危機に瀕している道具・材料の支援に充てられないだろうか。そんな思いを出発点に、「手仕事の循環をつくるプロジェクト」がはじまりました。

「手仕事の循環をつくるプロジェクト」が第12回京都・文化ベンチャーコンペティションで京都府知事賞 最優秀賞を受賞

2019年2月16日に開催された第12回京都・文化ベンチャーコンペティション(主催・京都府)の最終審査において、京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター特別ゼミ「工藝部」(代表:森由夏／プロダクトデザインコース)が取り組んできた「手仕事の循環をつくるプロジェクト」が(アイデア部門)京都府知事賞 最優秀賞を受賞しました。応募総数121件(うちアイデア部門88件)、書面審査―2次審査―最終審査の選考結果でした。



「手仕事の循環をつくるプロジェクト」が2019年度学長賞を受賞

2019年度 京都精華大学入学式においてウスビ・サコ学長から表彰を受けました。

京都商工会議所 伝統産業NEXTサロン Vol.4

販路開拓における展示販売会・国際見本市の可能性 ――DIALOGUE／京都インターナショナル・ギフト・ショーの事例から

日時 2019年11月1日(金) **会場** 京都商工会議所
ゲスト 山崎伸吾 京都職人工房／KOUGEI NOW ディレクター | 今井珠加 株式会社ビジネスガイド社
聞き手 米原有二 伝統産業イノベーションセンター長

オンライントークイベント「ぼくには『美しい』がわからない 美をめぐる木工職人と美術家の対話」

京都精華大学 グローバル教育センター主催オンライントークイベント
「ぼくには『美しい』がわからない 美をめぐる木工職人と美術家の対話」

日時 2021年1月13日(水) 18:00―19:30
開催方法 オンライン
主催 京都精華大学 グローバル教育センター
協力 日H gallery nichinichi
登壇者
仁城義勝 木地師
小松敏宏 美術作家／京都精華大学教員
米原有二 伝統産業イノベーションセンター長
ナビゲーター 奥村文絵 フードディレクター



京都精華大学 アセンブリーアワー講演会「マーガレット・ハウエルと開化堂 変わらない変わり方 ――時間を取り込んだ物づくり」

京都精華大学 アセンブリーアワー講演会・伝統産業イノベーションセンター共同企画
「マーガレット・ハウエルと開化堂 変わらない変わり方 ――時間を取り込んだ物づくり」

日時 2021年2月11日(木) 14:00―16:00
開催方法 オンライン
主催 京都精華大学
協力 株式会社アングローバル、株式会社開化堂
登壇者
池田賢一 株式会社アングローバル執行役員／
マーガレット・ハウエルデザインディレクター兼 MARGARET HOWELL LTD.取締役
八木隆裕 開化堂六代目／伝統産業イノベーションセンター特別共同研究員
モデレーター 西谷真理子 京都精華大学ポピュラーカルチャー学部客員教員



京都精華大学 同窓会「木野会」主催 講演会

伝統産業の歴史と現代社会でのあり方について

日時 2021年3月28日(日) **開催方法** オンライン **講師** 米原有二 伝統産業イノベーションセンター長

ICOM 京都大会関連事業「京都・くらしの文化×知恵産業展」展示会監修／寄稿

特別展「伝統とテクノロジー ――京都のものづくり／手仕事の遺伝子」
会期 2019年9月3日(火)―9月5日(木)
会場 京都市勧業館みやこめっせ
主催 京都商工会議所 文化×知恵産業展実行委員会
京都文化力プロジェクト実行委員会 構成団体京都府・京都市・京都商工会議所等
紹介企業 株式会社川島織物セルコン、京セラ株式会社、
株式会社島津製作所、株式会社SCREENホールディングス、
タカラパライオ株式会社、NISSHA 株式会社、任天堂株式会社、
福田金属箔粉工業株式会社、株式会社堀場製作所
協力 伝統産業イノベーションセンター



京都伝統産業ミュージアム企画展「職人たちのマーチ ―― March of Craftsmen」テキスト執筆

京都伝統産業ミュージアム企画展
「職人たちのマーチ ―― March of Craftsmen」
会期 2020年3月14日(土)―4月5日(日)
会場 京都伝統産業ミュージアム 企画展示室
主催 京都市、京都伝統産業ミュージアム
協力 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター

.....
米原有二(伝統産業イノベーションセンター長)が展示資料およびキャプションを執筆しました。



京都伝統産業ミュージアム リニューアル記念事業 企画展「工芸を分解してみる」展示監修／寄稿

京都伝統産業ミュージアム リニューアル記念事業 企画展
「工芸を分解してみる」
会期 2020年12月19日(土)―2021年1月24日(日)
会場 京都伝統産業ミュージアム 企画展示室
主催 京都市、京都伝統産業ミュージアム
協力企業(50音順) 河政印房 京印章 | 甘春堂 京菓子 | 京からかみ 丸二 唐紙 |
京こま雀休 京こま | 蘇峰窯 京焼・清水焼 | 小嶋商店 提燈 | 坪内三郎 京黒紋付染 |
長岡銘竹株式会社 京銘竹 | 中村ローソク 和蠟燭 | 南條工房 京仏具 | 山元染工場 京友禅
協力 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター

.....
米原有二(伝統産業イノベーションセンター長)が展示監修および寄稿しました。



本学の新設サテライトスペース「Demachi」にて染めの型紙展を開催

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター主催企画展

「染めの型紙にみる着物のデザイン——京都精華大学所蔵 田中直一コレクションから」



会期 〓 2021年3月16日〈火〉——3月27日〈土〉

休廊日 〓 2021年3月21日〈日〉、22日〈月〉

時間 〓 11:00—17:00

会場 〓 京都精華大学 サテライトスペース Demachi
京都市左京区田中上柳町 25-3 京阪出町柳ビル 2階

入館料 〓 無料

主催 〓 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター

協力 〓 京都友禅協同組合、京都精華大学情報館

展示企画サポート 〓 吉岡康介

本学デザイン学部教員志萱 晃一氏の広告に関する研究に協力

研究者 〓

米原有二 人文学部／伝統産業イノベーションセンター | 志萱晃一 デザイン学部ビジュアルデザイン学科グラフィックデザインコース

出口尚宏 学生グループ | 山本晃久 鏡師／山本合金製作所 五代目

伝統産業を表現するビジュアル研究

無形の文化資産である「京都の伝統産業」をより多くの人に、効果的に伝えるための新たなビジュアル表現を考察する。成果物として

制作したポスターを京都市営地下鉄「烏丸御池」駅構内に掲示しました。



パブリック・リレーションズ

Public Relations

伝統産業イノベーションセンターでは、ブランドブックや、ノベルティの制作、雑誌への寄稿など、多様なメディアを通して、研究活動や教育活動の紹介や普及に努めてきました。また、国際的な連携を目指し、ウェブサイトには英文も併記しています。こうした広報活動は、センターの3つの柱である「研究」「教育」「社会連携」を広く市民に伝え、市民とのあいだの相互理解を深めるための重要な役割を担っています。

京都精華大学広報誌
『木野通信』

.....
『木野通信』No.72 | 2019年9月 |
特集:伝統産業の課題から持続可能な社会を
.....
『木野通信』No.73 | 2019年12月 |
これからの社会のあり方を、
工芸からみつめなおす
.....
『木野通信』No.74 | 2020年7月 |
京都・伝統産業の工房・企業に弟子入り
——学んだ成果を学生たちが披露
.....
『木野通信』No.75 | 2020年12月 |
伝統産業イノベーションセンターが
マンガ人類学の手法で調査報告



京都精華大学同窓会
木野会報『精華人』

.....
『精華人』vol.29 | 2021年3月 |
特集:伝統産業のアップデート



伝統産業イノベーションセンター
ブランドブックの制作

伝統産業イノベーションセンター
で取り組む研究・教育活動をまとめた
ブランドブックを制作しました。
本センターで取り組むFISH SKIN
研究などを紹介するほか、これまで
40年間以上にわたって継続してきた
伝統産業演習などの詳細も記載
しています。
数量限定の特装版には表紙に漆
を塗りました。これは、「漆の紫外
線耐性」について共同研究を実施
している堤浅吉漆店さんのご協力
によって実現しました。この漆はか
なり樹液の状態に近いもので、ふだ
ん私たちがイメージする漆黒色で
はなく焦茶色に近い色味です。工
芸の世界に欠かせない漆が、自然
界の恵みから生まれたものであるこ
とを伝えようとしてしました。

デザイン: EIGHTYONE Inc.
印刷: 修美社
特装版表紙: 堤卓也 (堤浅吉漆店)



ノベルティ「折り紙」の配布

古くから受け継がれてきた伝統文様
の配色を変えて折り紙にしました。
6枚セットですべて裏表違うデザイン
です。裏面には学長メッセージや
京都精華大学における伝統産業
関連の講義や研究活動について
記載されています。オープンキャン
パス等で配布するほか、シンポ
ジウムなどのイベントでも京都精華
大学の伝統産業に関する取り組み
を知ってもらうためのツールとして
活用しています。

デザイン・印刷: GRAPH



SNSアカウント

.....

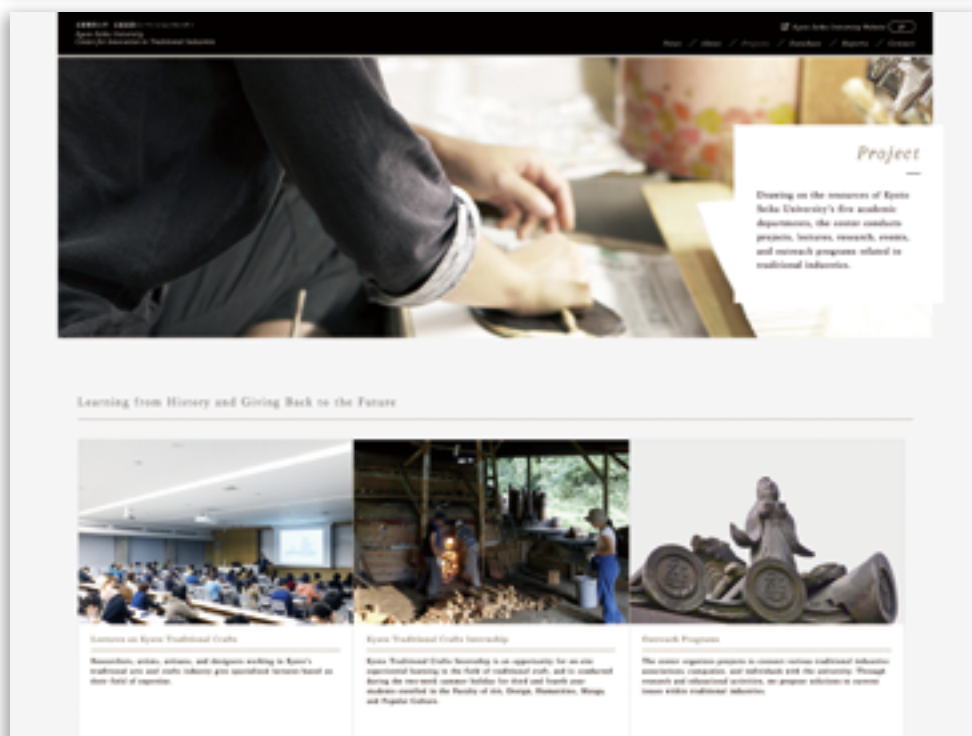
Instagram @seika_craft

Twitter @seika_craft

YouTube youtube.com/channel/UCP8MmZYdBlv2Tm7IPB5T6A



ウェブサイト記事に英文を追加



雑誌掲載

.....

KYOTO KOUGEI WEEK MAGAZINE

『おうさきるさ』Vol.1 | 2019年1月30日

寄稿：コラム「ぐるりのこと——手仕事における働き方改革」／米原有二（伝統産業イノベーションセンター長）

.....

KYOTO KOUGEI WEEK MAGAZINE

『おうさきるさ』Vol.2 | 2019年3月31日

寄稿：コラム「ぐるりのこと——女性が活躍する職場は工芸にある」／米原有二（伝統産業イノベーションセンター長）

.....

KYOTO KOUGEI WEEK MAGAZINE

『おうさきるさ』Vol.3 | 2020年2月27日

寄稿：コラム「ぐるりのこと——女性が男性ではなく、人間そのものを尊重しているかどうか」／米原有二（伝統産業イノベーションセンター長）

.....

KYOTO KOUGEI WEEK MAGAZINE

『おうさきるさ』Vol.4 | 2021年2月28日

寄稿：コラム「ぐるりのこと——作家か、職人か」／米原有二（伝統産業イノベーションセンター長）

.....

企画・編集：KYOTO CRAFTS MAGAZINE

発行：「KYOTO KOUGEI WEEK」実行委員会
平成30年度 文化庁国際文化芸術発信拠点形成事業



.....

大正大学地域構想研究所『地域人』第39号 |

2018年12月1日

寄稿：「職人技を未来に残すために——工芸の物語性を売る、ということについて」／米原有二（伝統産業イノベーションセンター長）

発行：大正大学出版会

.....

『文藝春秋』第97巻第11号 | 2019年11月1日

寄稿：京都の伝統工芸講座紹介「伝統芸能の声を聴く」

発行：株式会社文藝春秋

新聞掲載

京都新聞 | 2018年3月8日(木) | 夕刊

京組紐のサンプル、神祭具のかんなくす… 残り物を活用 京の職人応援

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。京組紐のサンプル、神祭具のかんなくす…残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

京都精華大生が「工藝部」設立

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

商品化、伝統産業に還元

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

日本経済新聞 | 2018年10月27日(土) | 夕刊

京都精華大 工芸の端切れがパズルに

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

京都精華大 工芸の端切れがパズルに

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

………
《魚革研究関連記事》
新潟日報 | 2021年1月26日(火) | 夕刊
西日本新聞 | 2021年1月28日(火) | 夕刊
中日新聞 | 2021年1月29日(火) | 朝刊
毎日新聞 | 2021年2月4日(火) | 朝刊
信濃毎日新聞 | 2021年2月5日(火) | 夕刊
産経新聞 | 2021年2月7日(火) | 朝刊

京都新聞 | 2018年7月21日(土) | 朝刊

漆器の職人、黒い漆で新たな価値を生み出す

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

漆器の職人、黒い漆で新たな価値を生み出す

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

京都新聞 | 2018年11月8日(木) | 朝刊

石黒宗磨の天目茶碗 発見

京の人間国宝陶芸家 没後50年
精華大が工芸調査 晩年の作品か



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

石黒宗磨の天目茶碗 発見

京の人間国宝陶芸家 没後50年
精華大が工芸調査 晩年の作品か

読売新聞 | 2018年12月5日(水)

「木葉天目茶碗」発見 石黒宗磨遺作か

人間国宝 幻の技法「14日から公開」



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

「木葉天目茶碗」発見 石黒宗磨遺作か

人間国宝 幻の技法「14日から公開」

京都新聞 | 2018年12月22日(土) | 朝刊

漆器の職人、黒い漆で新たな価値を生み出す

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

漆器の職人、黒い漆で新たな価値を生み出す

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

京都新聞 | 2019年2月9日(土) | 夕刊

森の枯渇 伝統産業の危機

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

森の枯渇 伝統産業の危機

伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

読売新聞 | 2020年9月12日(土)

革に変わった サーモンの皮

ワニヘビの代用・食品廃棄物を再利用



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

革に変わった サーモンの皮

ワニヘビの代用・食品廃棄物を再利用

東京新聞 | 2021年2月9日(火) | 夕刊

魚から高級革を

京都精華大など国際研究



京都府の職人たちが、伝統工芸品の残り物を活用し、新たな価値を生み出す取り組みが、京都府の職人たちに広がっている。

魚から高級革を

京都精華大など国際研究

出版物

.....

『京職人ブルース』台湾版(繁体字)

2018年6月21日

著者:米原有二

(伝統産業イノベーションセンター長)

翻訳:林詠純

2013年刊行の『京職人ブルース』(著:米原有二/イラスト:堀道広/京阪神エルマガジン社)の繁体字版の翻訳出版

.....

『近世の即位礼

——東山天皇即位式模型でみる京職人の技術』

2019年8月29日

著者:五島邦治、米原有二(伝統産業イノベーションセンター長)

出版社:青幻社

.....

文庫版『京都深掘りさんぽ』に取材協力

2020年7月7日

著者:グレゴリ青山

出版社:小学館

米原有二(伝統産業イノベーションセンター長)が著者のグレゴリ青山氏とともに京都の街を歩き工芸と職人文化を紹介。

.....

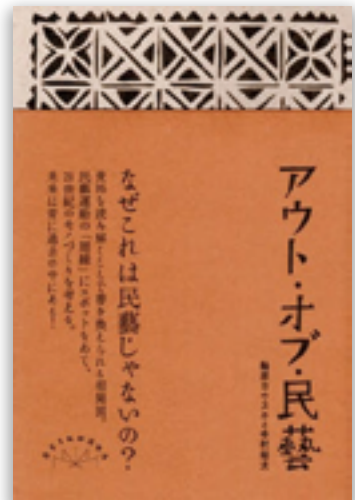
『アウト・オブ・民藝』(改訂版第二刷)

2019年12月15日

著者:軸原ヨウスケ・中村裕太

出版社:誠光社

なぜこれは民藝じゃないの? 2018年、誠光社にて全五回にわたるトークと資料の展示とで展開され、話題を呼んだ企画の書籍化。中村裕太(伝統産業イノベーションセンター員)の著書。初版の一部に修正・アップデートを加えた改訂版。



ラジオ出演

KBS 京都ラジオ「笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ」

放送日 2019年3月28日(木)

出演 伝統産業イノベーションセンター特別ゼミ「工藝部」

森由夏 デザイン学部プロダクトデザイン学科ライフクリエイションコース2年在籍(当時)

内容 「工藝部」が取り組んできた「手仕事の循環をつくるプロジェクト」について

MBS ラジオ「福島のかぶひろの、金曜でいいんじゃない?」

放送日 2019年12月6日(金)

出演 米原有二 伝統産業イノベーションセンター長

内容 2019年度「京都の伝統産業演習報告展」について



Members, Center for Innovation in Traditional Industries

伝統産業イノベーションセンター 学内センター員



Photo: Masuhiro Machida

米原有二
Yuji Yonehara
.....
センター長
Director



Photo: 表恒匡

中村裕太
Yuta Nakamura
.....
芸術学部
Faculty of Art



淡田明美
Akemi Awada
.....
デザイン学部教員
Faculty of Design



赤尾木織音
Kione Kochi
.....
研究コーディネーター
Research Coordinator



おがわさとし
Satoshi Ogawa
.....
マンガ学部
Faculty of Manga



飯澤ちあき
Chiaki Iizawa
.....
大学職員
Administrative Staff



小北光浩
Mitsuhiro Kokita
.....
ポピュラーカルチャー学部
Faculty of Popular Culture



下田啓真
Hiromi Shimoda
.....
大学職員
Administrative Staff



末次智
Satoshi Suetsugu
.....
人文学部
Faculty of Humanities

Special Research Fellows, Center for Innovation in Traditional Industries

伝統産業イノベーションセンター 特別共同研究員



金谷勉 Tsutomu Kanaya
.....
有限会社セメントプロデュースデザイン 代表取締役社長 / クリエイティブディレクター
President / Creative Director, Cement Produce Design Ltd.
.....

1999年にデザイン会社「セメントプロデュースデザイン」を設立。大阪、京都、東京を拠点に企業のグラフィックデザインやプロモーション、商品開発のプロデュースに携わる。2011年から、全国各地での商品開発プロジェクト「みんなの地域産業協業活動」を始め、500を超える工場や職人との情報連携を進める。職人達の技術を学び、伝える場「コトモノミチ」を東京墨田区と大阪本社ビル1階にて展開。京都精華大学、金沢美術工芸大学講師を務める。自著に『小さな企業が生き残る』（日経BP社）がある。
<http://www.cementdesign.com/>



永田宙郷 Okisato Nagata
.....
合同会社ててて協働組合 共同代表 / プランニングディレクター
Co-Founder / Planning Director, Te Te Te Consortium
.....

1978年福岡生まれ。金沢美術工芸大学芸術学専攻卒。大学在学中の2001年に仏・エルメス社と刀剣を制作し、第6回イスタンブールビエンナーレはじめ、現代アートの展覧会に出演。その後、金沢21世紀美術館（非常勤）、デザインプロデュース会社等を経て現職。「ものづくりをつくる」をコンセプトに数多くの事業戦略策定と商品開発に従事。伝統工芸から最先技術まで時代に合わせた再構築や、視点を変えたプランニングを多く手掛ける。2012年より「ててて見本市」を開催。
<https://tetete.jp>



山崎伸吾 Shingo Yamasaki
.....
ディレクター / 音楽家
Director / Musician
.....

1978年倉敷市水島生まれ。京都伝統産業ミュージアムチーフディレクター。京都を拠点に、音楽・美術・工芸・デザインの分野で様々な人々と協働しプロジェクトをおこなっている。地域に根ざしたものづくりに強い関心を持ち、主に伝統工芸の分野で作り手に寄り添った企画をおこなう。
<https://kougeiweek.kyoto/>
<https://www.kougeimagazine.com/>
<https://kmtc.jp/>



新山直広 Naohiro Niiyama
.....
合同会社TSUGI 代表取締役
Representative, Tsugi llc.
.....

1985年大阪生まれ。京都精華大学デザイン学科建築分野卒業。2009年福井県鯖江市に移住し、鯖江市役所を経て2015年TSUGI llc.を設立。地域に特化したインタウンデザイナーとして地場産業のブランディングをおこなっている。また通常のデザインワークだけではなく、眼鏡素材を転用したアクセサリーブランド「Sur」、福井のものづくりとデザインを体感できる小さな複合施設「TOURISTORE」、産業観光プロジェクト「RENEW」の運営など、領域を横断しながら創造的な産地づくりをおこなっている。グッドデザイン賞等受賞多数。
<https://tsugilab.com/>



中川周士 Shuji Nakagawa
.....
中川木工芸比良工房 主宰
Craftsman, Nakagawa Mokkaugei Hirakoubou
.....

1968年京都市生まれ。1992年、京都精華大学美術学部立体造形卒業。大学卒業と同時に父清司（重要無形文化財保持者）に師事、木工職人として桶、指物、銅物、ろくろなどの技術を学ぶ。木工職人として10年間働きながら、鉄による現代美術作品も制作発表。2003年滋賀県志賀町（現在は合併により大津市）に独立工房「中川木工芸比良工房」をひらく。伝統的な桶制作の技術を用いて、新しく洗練されたデザインのシャンパンクーラーなどの作品を手がけている。
<https://nakagawa.works>



八木隆裕 Takahiro Yagi

.....

茶筒老舗 開化堂六代目
Sixth-generation Tea Caddy Maker, Kaikado

.....

1974年京都市生まれ。大学卒業後、京都ハンディクラフトセンター（アミタ株式会社）での勤務を経て開化堂の六代目を継ぐ。修業の後、イギリス・ロンドンでのプロモーションに単身で挑み海外販路の拡大に挑戦。また海外デザイナーとのコラボレーションによる新しいプロダクトラインの開発も手掛ける。伝統工芸の若手後継者がこれまでにない新しいものを生み出していくプロジェクトユニット「GO ON (ゴオン)」のメンバーとしても活動。過去の概念にとらわれない、新しい工芸の有り方を模索している。

<https://www.kaikado.jp>



竹中健司 Kenji Takenaka

.....

竹中木版五代目摺師 / 有限会社竹笹堂 代表取締役 / 木版画作家
Fifth-generation Woodblock Artist, Takenaka Mokuhan / Director, Takezasado

.....

1970年京都市生まれ。京版画の摺師として伝統的な木版技術の継承、失われた技術の再現や古版本の調査・修復に取り組む。また、国内外でワークショップやアーティストとの共同制作をおこなう。ボストン美術館、フランス国立図書館などに作品所蔵。京都木版画工芸組合副理事長等務める。著書に「京都・竹笹堂のはじめての木版画」(光村推古書院)など。

<https://www.takezasa.co.jp/>



松山幸子 Sachiko Matsuyama

.....

一般社団法人 パースペクティブ 共同代表
Co-Founder, Perspective

.....

根底にあるのは、人と自然のサステナブルな関わり方や、自己よりもっと大きなもののいとなみの象徴でもある、「工藝」へのまなざし。工藝は日本の社会、価値観、意識を映し出す「鏡」であると位置づけ、教育プログラムやツアーを企画してきた。大量生産で生まれた均質な工業製品の溢れる社会的背景の中で、モノづくりへの親近感や、自然との関係性の中に身を置くことのできる感性が失われてきていることに危機感を感じ、2019年6月、パースペクティブを設立。自然とつながるモノづくりのあり方を事業として表現。

<https://forest-of-craft.jp/>



千田優希 Yuki Senda

.....

唐紙屋長右衛門 唐長 十二代目
Twelfth-generation Karakami Printmaker, Karacho

.....

18歳から唐紙の制作を始める。京都迎賓館の磨紙制作に携わり高い評価を得る。関西に限らず全国各地の寺院をはじめ、歴史的建造物から一般住宅に至るまで自身の作った唐紙を施工する技術を独学で習得する。屏風、アートパネルの企画提案から制作施工まで幅広く制作。二級建築士でもあり、インテリア小物から建築プロデュースまで幅広く提案。「京都の伝統工芸講座」講師。

<https://www.karacho.co.jp/>



鞍田崇 Takashi Kurata

.....

哲学者
Philosopher

.....

哲学者。1970年兵庫県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科修了。現在、明治大学理工学部准教授。近年は、ローカルスタンダードとインティマシーという視点から、現代社会の思想状況を問う。著作に「民藝のインティマシー「いとおしさ」をデザインする」(明治大学出版会2015)など。民藝「案内人」としてNHK-Eテレ「趣味どきっ! 私の好きな民藝」に出演(2018年放送)。

<https://takashikurata.com/>



堤卓也 Takuya Tsutsumi

.....

堤浅吉漆店 専務取締役
Senior Managing Director, Tsutsumi Asakichi Urushi Co., Ltd.

.....

明治期から続く漆の精製業者の四代目。文化財修復や伝統工芸など、用途に合わせた漆を提供。「漆掻き職人」と「塗師」の中間に立つ立場から、漆の流通量の減少に危機感を感じ、漆のある暮らしを次世代の子ども達につなぐ取り組みとして「うるしのいつぼ」を始める。「サーフボード×漆」「BMX×漆」「スケボー×漆」など、新しい取り合わせを通じて、漆との出会いを提案。1万年前から日本の風土で使われてきたサステナブルな天然素材「漆」を、次の時代に継承するべく、2019年6月、パースペクティブを設立。

<https://www.rethink-urushi.com/>

<https://forest-of-craft.jp/>



江明親 Min-Chin Kay Chiang

.....

国立台北芸術大学大学院建築文化財研究所 専任副教授
Assistant Professor, Graduate Institute of Architecture and Cultural Heritage,

Taipei National University of the Arts

.....

国立台北芸術大学大学院建築文化財研究所にて専任副教授兼所長を務めるほか、台湾文化部文化資産局諮問委員(2016-2020)、文化遺産・職人技術研修プログラムのアドバイザーチームディレクターとして、工芸や無形文化財と地域コミュニティ、公共機関、コロニアリズムの関係性を研究。著書に *Traditional Crafts Within and Beyond Intangible Cultural Heritage* (Taipei: Hanlu Publisher, 2019)、 *Memory Contested, Locality Transformed: Representing Japanese Colonial 'Heritage' in Taiwan* (Amsterdam University Press and Chicago University Press, 2012)、寄稿文に“Intangibility Re-Translated” 赤川夏子、Laurajane Smith 編集、 *Safeguarding Intangible Heritage: Practices and Politics* (無形文化遺産の保護) (Abingdon and New York: Routledge, 2019) などがある。



井上葉子 Yoko Inoue

.....

ベニントン大学視覚芸術学科 / パブリックアクションセンター兼任教員
Full-Time Faculty Member, Visual Arts and Center for Advancement of Public Action,

Bennington College

.....

1989年ニューヨーク市立大学ハンターカレッジ校卒業後、国立民族博物館職員、ニューヨーク日本協会職員などを経て、1999年同学大学院修士課程修了。アイデンティティや異文化同化の過程などをテーマに彫刻、インスタレーション、パフォーマンスなど、多様なメディアを用いて作品を制作。世界各国で展示や滞在制作をおこなう。人類学的な研究やフィールドワークを通して、グローバル経済の中で文化価値が商品化される現象やグローバル化が伝統文化にもたらす影響などを取り上げている。近年では、伝統知識、工芸、食にまつわる諸問題に着目し、リサーチを中心としたプロジェクトに取り組む。2004年よりベニントン大学客員教員、2011年より非常勤講師、2014年より現職。ニューヨーク在住。

アリス・ドゥブリエ Alice Doublier

.....

文化人類学者 / セント・アンドリュース大学社会文化人類学フィッセン 財団博士研究員
Anthropologist / Fyssen Foundation Postdoctoral Fellow, Department of Anthropology,

University of St Andrews (UK)

.....

2008年パリ・ナンテール大学(元パリ第10大学)文化人類学学部卒業後、2011年から2013年まで京都精華大学の研究生として来日、日本の現代陶芸教育について一年半調査。2018年フランス国立民俗博物館博士論文賞受賞。2017年、今和次郎著作「考現学とは何か」をフランス語に翻訳。2017年から2019年までフランス国立社会科学高等研究院の講師として、体や五感の知識、人間と物質界の関係について教える。同時に研究活動を続け、日本の焼き物の伝統産地を巡り、工芸の調査と日本の発酵食品について研究し始める。現在、失われつつある(木桶仕込み)と(陶石)の原料に関する伝統技術を調査中。



International Partner Universities and Institutions

協定校／機関

USA

- University of Michigan School of Art and Design
- Bard College
- Southern California Institute of Architecture (SCI-Arc)
- Cornell College
- Rhode Island School of Design (RISD)
- California College of the Arts
- The Cooper Union School of Art
- ArtCenter College of Design
- International English Language Institute Hunter College, City University of New York

Canada

- English Language Institute, University of British Columbia

UK

- University of the Arts London / Central Saint Martins
- University of the Arts London / Chelsea College of Arts
- University of the Arts London / Camberwell College of Arts
- University of the Arts London / Wimbledon College of Art
- The University of Edinburgh / Edinburgh College of Art
- The Glasgow School of Art

the Netherlands

- HKU University of the Arts Utrecht
- Gerrit Rietveld Academie

Germany

- Braunschweig University of Art
- Kunsthochschule Kassel

Finland

- Aalto University (School of Arts & Design & Architecture)
- The Arts Academy at Turku University of Applied Sciences

France

- Ecole Nationale Supérieure d'Architecture Paris-Malaquais
- L'Ecole de Design Nantes Atlantique
- Paris College of Art
- Ecole Speciale d' Architecture
- L'Ecole Nationale Supérieure d'Art de Limoges
- Centre international d'études françaises (CIDEF)
- Université catholique de l'Ouest

Belgium

- Wallonie-Bruxelles Internationa

Turkey

- Ibn Haldun University

India

- Indian Institute of Technology Bombay

Indonesia

- Maranatha Christian University

Korea

- Daegu University
- Hongik University

Thailand

- Chiang Mai University

Taiwan

- Providence University
- National Museum of Taiwan History
- Taipei National University of the Arts

Vietnam

- Vietnam National University Hochiminh City / University of Social Sciences and Humanities

Hong Kong

- Chu Hai College of Higher Education

Senegal

- Universite Cheikh Anta Diop de Dakar (UCAD)

Nigeria

- Kwara State University

Republic of Mali

- Institut des Sciences Humanities

Cameroon

- Université de Maroua

Australia

- The Australian National University School of Art

New Zealand

- AUT International House, Auckland University of Technology

Japan

- International Research Center for Japanese Studies
- Research Institute of Humanities and Nature
- The Faculty of Law and Economics, Okinawa University
- The Faculty of Foreign Languages, Sapporo University
- Kyoto University
- Kyoto city Zoo
- Kyoto Prefecture
- Nagahama city
- Tadotsu town
- Seika town
- Sakyo ward, Kyoto city



あとがき Afterword

米原有二

京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター長

2020年度から年間の活動報告を冊子としてまとめることにしました。この初号は、2018年度から3年間の採択となった文部科学省私立大学研究ブランディング事業のまとめを兼ねるため3年分の合本となります。

あらためて振り返ると、この3年間に伝統産業イノベーションセンターが取り組んできた研究活動は工芸を対象に「職人文化の継承」や「持続可能な手仕事」「自然環境との関わり」などの視点で計画したものが目立ちます。こうした視点は、国内外の研究機関との連携、共同研究体制の構築がもたらしてくれたものです。それぞれの特色をもつ国や地域の、さまざまな研究領域の研究者たちと交わした議論が、工芸を起点に社会を考える眼差しを私たちに与えてくれました。

また、14名の特別共同研究員の皆さんにはシンポジウムや研究会での議論を通じて、新たな課題の発見にお付き合いをいただきました。

あらためて、皆様のご協力に感謝を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、中止や延期を余儀なくされた活動も多くありましたが、この環境下における活動方法を見出すべく模索を続けています。

伝統産業イノベーションセンターは多くの方々の手厚いご支援を賜り、設立間もない研究機関としての助走を勢いよく走り抜くことができました。2021年からは、築いた足場をより強固にしつつさらなる展開をめざします。

Email dento@kyoto-seika.ac.jp
Website <http://dento.kyoto-seika.ac.jp/>
Instagram/Twitter @seika_craft

Partner Insitutions



京都精華大学
伝統産業イノベーションセンター
イヤーブック2018-2020
Center for Innovation in Traditional Industries
Yearbook 2018-2020
Kyoto Seika University

発行日 | 2021年3月31日

監修 | 米原有二
編集 | 小屋竜平
翻訳・英字校正 | 赤尾木織音
デザイン | 川越健太

印刷 | 渡辺印刷株式会社
発行 | 京都精華大学 伝統産業イノベーションセンター
〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137

